

服部遺跡発掘調査報告書

1986年3月

服部遺跡発掘調査団
豊中市教育委員会

服部遺跡発掘調査報告書

1986年3月

服部遺跡発掘調査団
豊中市教育委員会

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会による市立第4中学校体育館建設に伴い事前調査を行った服部遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、豊中市教育委員会からの委託によって実施した。
3. 調査期間は、昭和60年9月5日から同年9月25日迄の20日間である。
4. 本文の執筆については、各文末に記して文責を明らかにした。
5. 遺物実測は、木下亘・須藤聖子・加藤志月・酒井泰子が担当した。
6. 遺物実測図の内、断面にスクリーントーン貼付のものは、瓦質及び生駒西麓産の土器を、黒塗りのものは須恵質の土器をそれぞれ示す。
7. 掲載写真の内、遺構写真を木下、竹谷俊彦が、遺物写真を木下が担当した。
8. 本書の編集は木下が担当した。

本文目次

	頁
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 位置と環境	3
第Ⅲ章 番号と検出遺構	6
1. 番号と遺構分布	6
2. 遺構の概要	11
第Ⅳ章 出土遺物	17
1. 遺物の概要	17
第Ⅴ章 結語	33

図版目次

本文対照頁

図版 1 調査区全景（東より）	6
図版 2 1. SK01（南より）	11
2. SK02 遺物出土状況（東より）	11
図版 3 1. SK03 全景（南より）	12
2. SK04・05 全景（南より）	12
図版 4 1. SK06 全景（南より）	13
2. SK06 遺物出土状況（東より）	13
図版 5 1. SD05 杭列（南より）	14
2. SE01 全景（東より）	13
図版 6 1. SE01 立ち割り後 全景（東より）	13
2. 同上	13
図版 7 1. SE01 井戸枠曲物細部	13
2. 同上	13

図版 8	1. 調査区外検出井戸 全景（南より）	16
	2. 同上細部	16
図版 9	S K01 出土遺物	17
図版10	S K01・02・03・04・包含層 出土遺物	17-27
図版11	S K06・S D05・S E01・調査区外検出井戸 出土遺物	27-32

挿 図 目 次

	頁
第1図 周辺遺跡分布図（縮尺1/25000）	2
第2図 調査地周辺地形図（縮尺1/20000）	4
第3図 調査地区位置図（縮尺1/2500）	5
第4図 調査区北・西壁土層断面図（縮尺1/50）（須藤・竹谷・野村実測、木下整図）	7-8
第5図 調査地遺構全体図（縮尺1/50）（木下・竹谷・野村実測、木下整図）	9-10
第6図 S K01平面図・土層断面図（縮尺1/40）（木下・竹谷・野村実測、木下整図）	11
第7図 S K03平面図・立面図（縮尺1/40）（木下実測・整図）	12
第8図 S K04・05平面図・土層断面図（縮尺1/40）（木下・野村実測、木下整図）	12
第9図 S E01平面図・立面図（縮尺1/20）（木下・竹谷実測、木下整図）	15
第10図 調査区外検出井戸実測図（縮尺1/20）（木下・竹谷実測、木下整図）	16
第11図 S K01出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下・須藤実測、木下整図）	22
第12図 S K01出土遺物実測図（縮尺土器1/4・石器1/2） (木下・須藤・加藤・酒井実測、木下整図)	23
第13図 S K02出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下・須藤・加藤実測、木下整図）	24
第14図 S K03出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	24
第15図 S K04出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	25
第16図 S K05出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	25
第17図 P 1出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	26
第18図 遺物包含層出土遺物実測図（縮尺土器1/4石器1/2）（木下・加藤実測、木下整図）	26
第19図 S K06出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	28
第20図 S E01出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下・加藤実測、木下整図）	29
第21図 S D05出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測・整図）	30
第22図 調査区外検出井戸出土遺物実測図（縮尺1/4）（木下実測、整図）	31

第Ⅰ章 調査に至る経緯

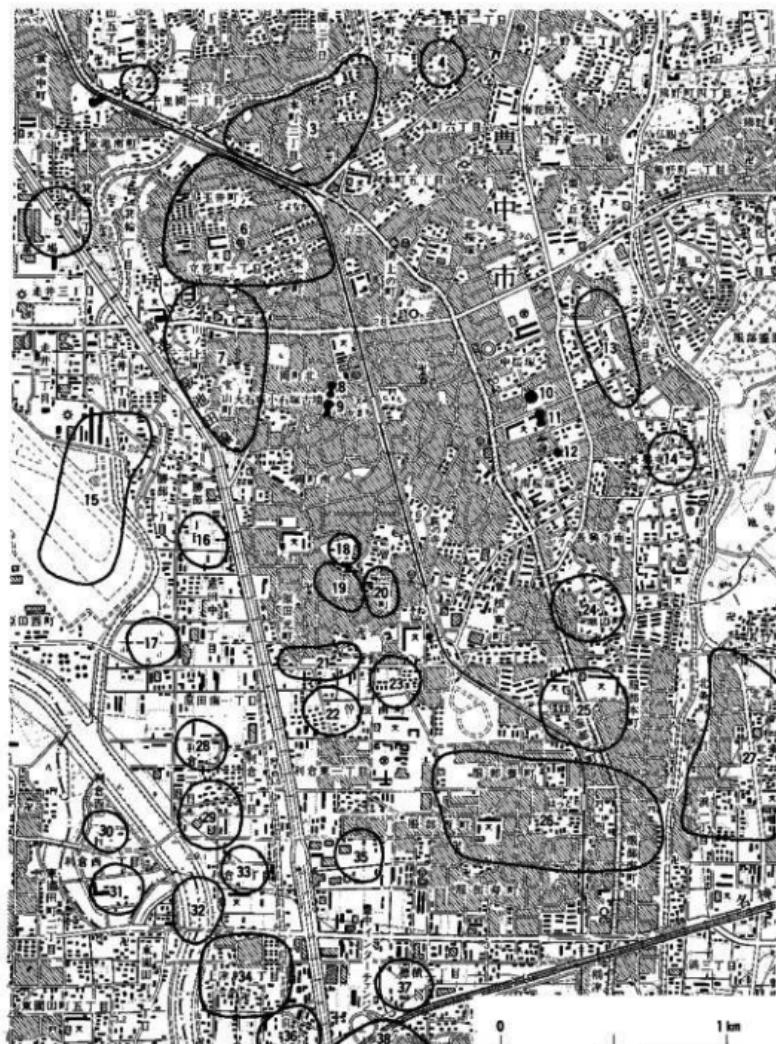
今回の発掘調査は市立第4中学校体育館建て替え工事に伴う服部遺跡の事前調査として実施したものである。調査地は従来遺跡として周知されていなかったが、南側に隣接して服部遺跡が存在するため、豊中市教育委員会により試掘調査の実施がなされた。その結果、中世期及び弥生後期の遺物包含層・遺構面を検出し、服部遺跡が従来の知見よりも更に北側に広がることが判明した。発掘調査は試掘結果に基き調査区の設定がなされた。調査区は体育館建設によって破壊される部分の内、特に弥生後期包含層の厚い堆積が認められた南側部分に限定して行った。面積は約140m²である。調査にあたっては、包含層上面まで重機による排土を行い、それ以下は手掘りにより、遺構の検出に努めた。

調査は、調査区に沿って、4m方眼を設定し、東よりA～E、北から1～3と付し、北東の杭でグリット名を代表させた。

又、調査中、北側で行われていた基礎工事に於いて中世期の井戸が検出されるという事態が生じ、これについても急撫調査を実施した。

調査組織

調査担当	木下直
調査補助員	竹谷後彦・野村大作
事務局	豊中市教育委員会社会教育課
調査協力	奥田組、安西工務店、染の川組、須藤聖子、加藤志月・酒井泰子（関西大学）、岡林孝作（筑波大学）



1. 御神山古墳
 2. 南刀根山遺跡
 3. 本町遺跡
 4. 金寺山廃寺跡
 5. 畿輪遺跡
 6. 新免遺跡
 7. 山ノ上遺跡
 8. 小石塚古墳
 9. 大石塚古墳
 10. 大塚古墳
 11. 御嶽 / 塚古墳
 12. 南平塚古墳
 13. 下原窯跡群
 14. 長興寺遺跡
 15. 聖部遺跡
 16. 聖部東遺跡
 17. 莊田中町遺跡
 18. 莊田城跡
 19. 原田遺跡
 20. 曾根遺跡
 21. 莊田元町遺跡
 22. 曾根南遺跡
 23. 豊島北遺跡
 24. 城山遺跡
 25. 腹部遺跡
 26. 積積遺跡
 27. 小曾根遺跡
 28. 利倉北遺跡
 29. 利倉南遺跡
 30. 稲堂の前遺跡
 31. 利倉西遺跡
 32. 上津島川床遺跡
 33. 利倉南遺跡
 34. 上津島南遺跡
 35. 腹部西遺跡
 36. 上津島南遺跡
 37. 積積ポンプ場遺跡
 38. 島田遺跡

第1図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 位置と環境

服部遺跡は、大阪府豊中市服部本町・同服部元町一帯に所在する遺跡である。調査地は豊中台地の南縁部下の標高T P 4.5m ほどの低地に位置している。

当遺跡の西方約2.2kmには猪名川が、東方約0.5kmには天竺川がそれぞれ南流している。その立地は東西及び南方向に開けた沖積平野の北端にあたり、すぐ北方には豊中台地が広がっている。

この沖積地には、縄文時代以降、多数の遺跡の存在が知られている。

猪名川東岸では、田能遺跡・勝部遺跡・利倉遺跡・利倉西遺跡・上津島遺跡・島田遺跡など当地域の拠点的集落が展開している。

又、当遺跡の隣接地域では、穂積遺跡・小曾根遺跡・北条遺跡・城山遺跡・豊島北遺跡などが知られている。

まず、縄文時代では当遺跡と天竺川を挟んで東側に位置する小曾根遺跡に於いて、弥生時代前期の遺物包含層中より、縄文時代晩期長原式に属する深鉢破片が検出された。^{註1}数こそ少ないものの、当該地域に於いて縄文時代の遺跡が存在したことを示唆する資料として重要である。

弥生時代に入ると、遺跡数の急激な増加と面的な拡大を看取することができる。

調査地の北側、豊中台地南縁部分に立地する城山遺跡は、現在の所、明確な遺構の広がりは把握されていないが、弥生時代中期第Ⅱ様式の土器が採集されている。

又、小曾根遺跡では、弥生時代前期から後期にわたって連綿と集落が形成されている。特に中期では、方形周溝墓の検出をみ、墓域の一端が明らかにされつつある。^{註2}

弥生時代後期では、小曾根遺跡をはじめとして、北条遺跡・穂積遺跡などで多数の遺構が検出されている。

古墳時代に入ると集落では、前述の各遺跡に於いて弥生時代後期に引き続き生活の痕跡を辿ることができる。

北方の豊中台地上には、前期末～中期にかけての桜塚古墳群が出現する。本古墳群は人石塚古墳・小石塚古墳を中心とする東群と、大塚古墳・御獅子塚古墳を中心とする西群とに大きく二分され、その総数36基を数える。^{註3}

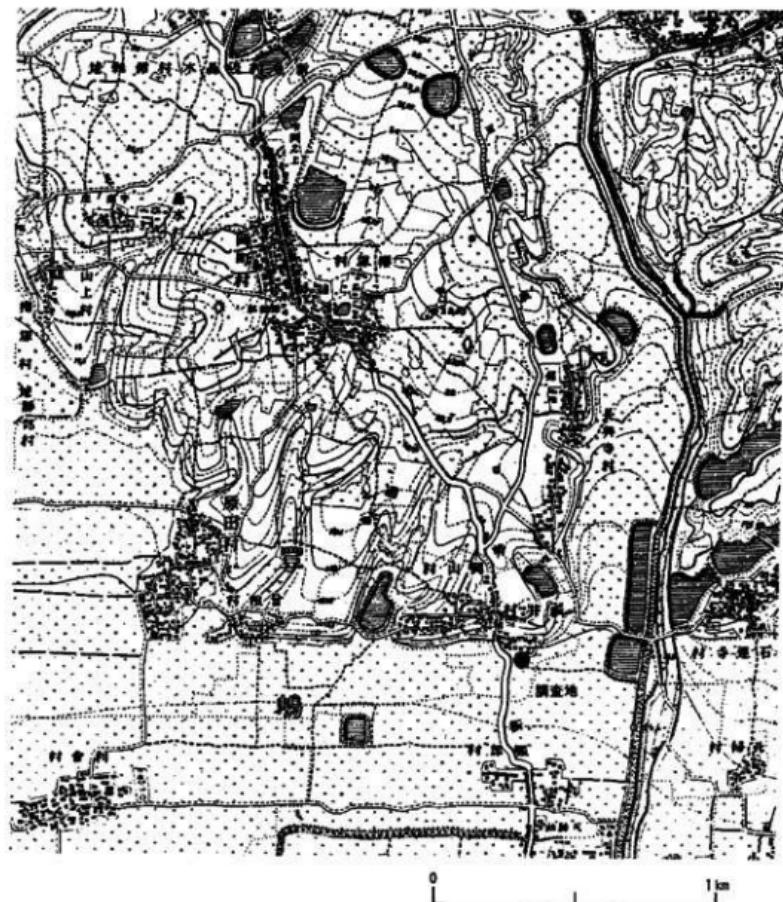
又、当遺跡と隣接する穂積遺跡でも小規模な後期の円墳が検出され、周溝内より多量の埴輪が検出されている。この段階には沖積地にも古墳が造営されていたことが判かる。^{註4}

中世期に入ると周辺では、小曾根遺跡・北条遺跡・穂積遺跡など、広範囲に遺跡の分布が知られている。

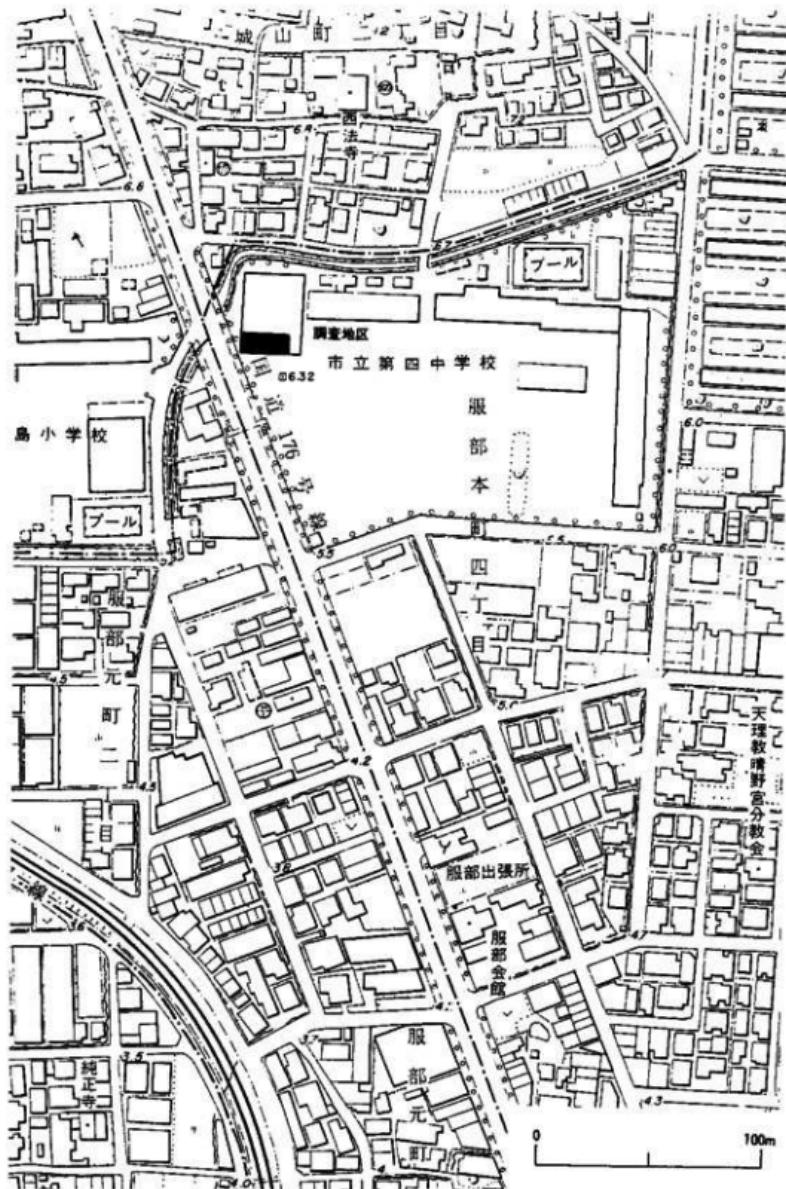
以上の様に調査地周辺地域は、弥生時代から中世に至る大規模な遺跡が稠密に分布しており、歴史的にも重要な地域である。

(木下)

- 註1 「小曾根遺跡」現地説明会資料 豊中市教育委員会調査 1981年
- 2 豊中市教育委員会調査 1981年
- 3 「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1982年度」「豊中市文化財調査報告第9集」 1983年
「御獅子塚古墳」現地説明会資料 豊中市教育委員会調査 1985年
- 4 「穂積遺跡」現地説明会資料 豊中市教育委員会調査 1981年



第2図 調査地周辺地形図



第3図 調査地区位置図

第Ⅲ章 層序と検出遺構

1. 層序と遺構分布

調査区内の層序は、以前の建物基礎などにより擾乱を被る部分が少なくない。しかし概ね80cm前後の盛り土下に旧水田が存在する。その直下に10cmほどの床土層を挟んで、中世期遺物包含層が約20cmほどの厚さで堆積している。この層は灰褐色を呈する砂質土で瓦器・土師器・陶器などの細片が含まれている。これは、調査区北側の工事による掘削面でも、ほぼ同様の厚さを保ち堆積していることが確認でき、広範囲にわたっていることが判かる。この包含層中層乃至至は直下より切り込む、中世期の遺構が多く認められる。

旧水田面以下、1m前後で弥生後期包含層に達する。包含層は40cmほどの厚さを有し、上下二枚に分けることができる。色調は、暗灰紫色～黒紫色を呈し、非常に粘性の強い土層で、多量の弥生土器破片を包含している。この包含層は調査区の中でも弥生期の遺構分布密度の高い西側に厚く堆積しており、東側に向かって徐々に薄くなっている。これと共に、その色調も明るさを増し、灰紫色に変化する。又、土器の包含状態も、西側が多く東に向かって減少する傾向が看取できる。又、北側部分は中世期の河川S D05により地山まで深く抉り取られており、弥生包含層は存在しない。

地山は青灰色シルト層で、弥生期の遺構は大半この上面から切り込んでいる。

これ以下は青灰色粘土層、灰色砂層などが堆積している。

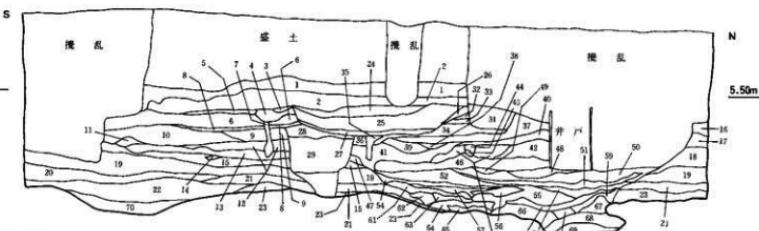
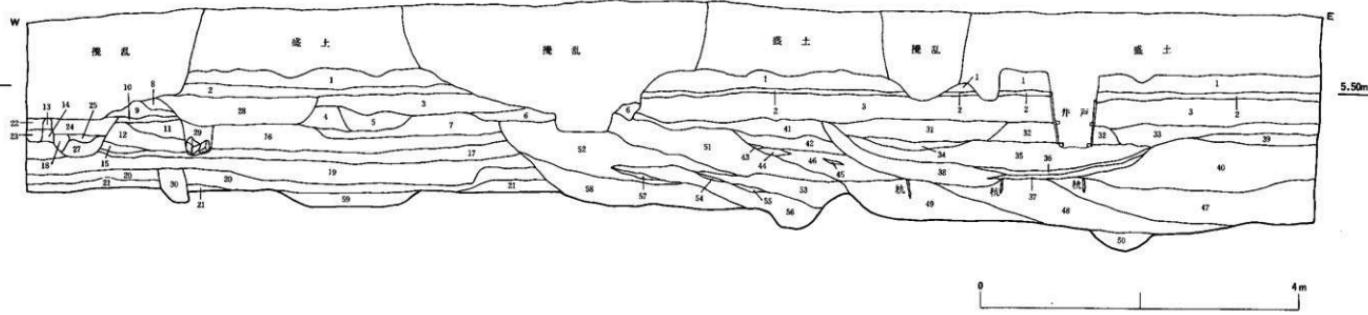
又、地山面までは、概ね旧水田面より1.4mほどを測る。

遺構の分布について見てみると、弥生期では包含層の厚さとも呼応し、調査区西側にその密度が高い。遺構は、土塙を主体に四条の溝とピット群である。遺構の広がりは、調査区内の状況から観て、北及び西側にかなりのびる可能性が考えられる。

平安期のものは、土塙一基のみで、遺構の広がりを堆定することはできない。

中世に入ると、調査区の北側24mほどの地点で、羽釜を利用した井戸が検出されており、遺構は北側にも拡大していると考えられる。又、南側にも包含層はのびており、広範囲な遺跡の広がりを推定しうる。

(木下)



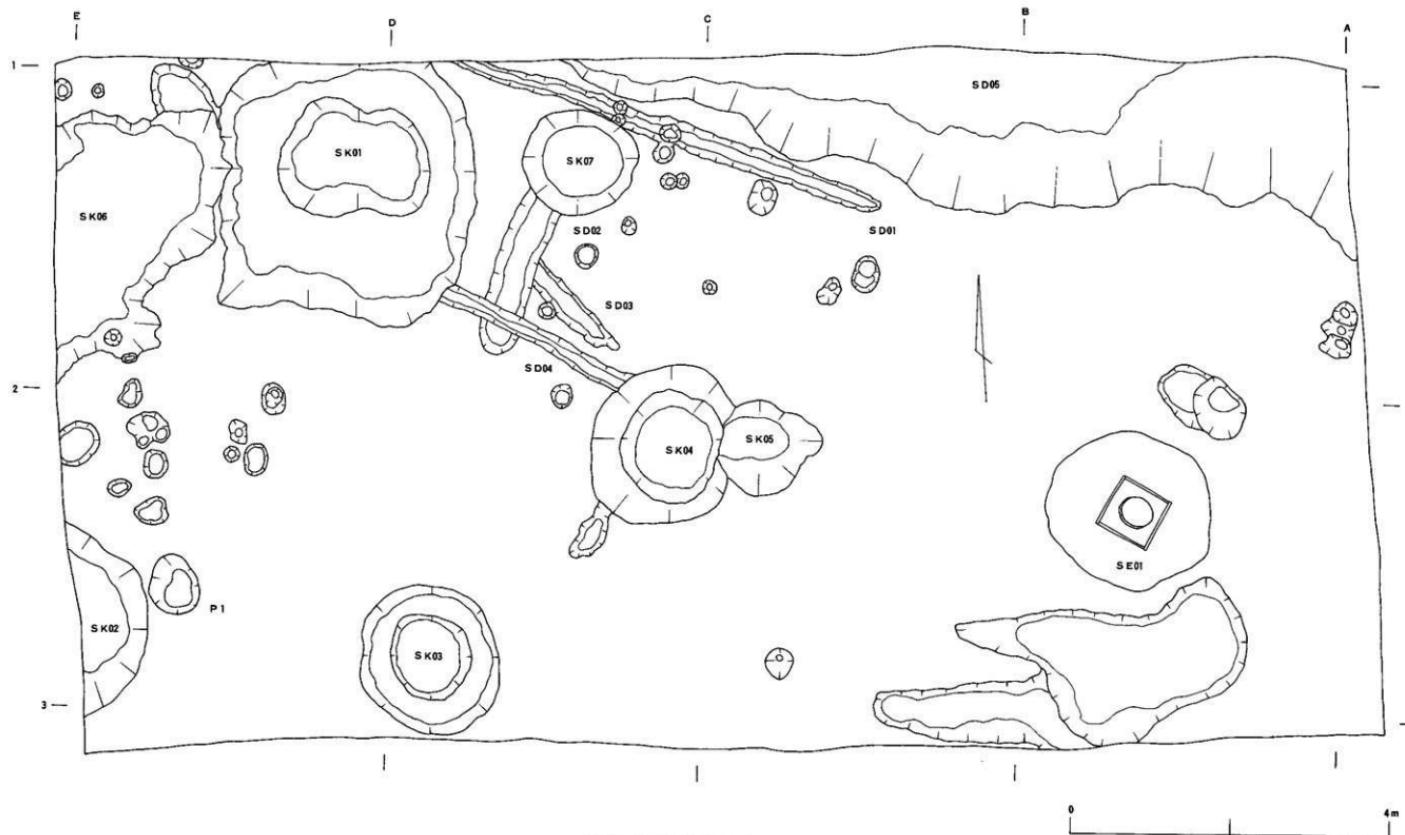
西壁土層說明

- | | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------|-------------------------|
| 1. 緑色上葉 | 19. 墓原色地黒土質 (北壁21層に付辺) | 37. 墓原色地黒土質土 | 55. 黒色地黒土質 |
| 2. 床土屋 | 20. 黑色地黒土質 | 38. 黑色地黒土質 | 56. 黑色地黒土質 |
| 3. 黑色地黒土質 | 21. 黑色地黒土質土 (北壁21層に付辺) | 39. 黑色地黒土質 | 57. 黑色地黒土質 |
| 4. 茶褐色地黒土質 | 22. 黑色地黒土質 | 40. 黑色地黒土質 | 58. 黑色地黒土質 |
| 5. 黑色地黒土質 | 23. 墓原色地黒土質土 (北壁21層に付辺) | 41. 黑色地黒土質 | 59. 黑色地黒土質 |
| 6. 黑褐色地黒土質 | 24. 黑色地黒土質 | 42. 黑色地黒土質 | 60. 黑色地黒土質 |
| 7. 黑色地黒土質 | 25. 黑色地黒土質 | 43. 墓原色地黒土質 | 61. 黑色地黒土質上層 |
| 8. 黑褐色地黒土質 | 26. 黑色地黒土質 | 44. 黑色地黒土質 | 62. 黑色地黒土質上層 |
| 9. 黑褐色地黒土質 | 27. 黑色地黒土質 | 45. 精白地黒土質 | 63. 黑色地黒土質 |
| 10. 黑褐色地黒土質 | 28. 黑色、青褐色地黒土及び黒褐色地黒土混生層 | 46. 黑色地黒土質 | 64. 黑色地黒土質上層 |
| 11. 黑色地黒土質 | 29. 同 上 | 47. 黑色地黒土質 | 65. 墓原色地黒土質 |
| 12. 黑色地黒土質 | 30. 同 上 | 48. 黑色地黒土質 | 66. 黑色地黒土質 |
| 13. 黑色地黒土質 | 31. 黑色地黒土質 | 49. 黑色地黒土質 | 67. 黑色地黒土質 |
| 14. 黑色地黒土質 | 32. 黑褐色地黒土質 | 50. 墓原色地黒土質 | 68. 黑色地黒土質 |
| 15. 明灰色地黒土質 | 33. 黑色地黒土質 | 51. 黑色地黒土質 | 69. 黑色地黒土質上層 (SK0267上層) |
| 16. 暗灰色地黒土質 (北壁21層に付辺) | 34. 暗灰色地黒土質 | 52. 黑色地黒土質 | |
| 17. 黑色地黒土質上層 (北壁21層に付辺) | 35. 黑色地黒土質 | 53. 白色地黒土質 | |
| 18. 黑色地黒土質 (北壁18層に付辺) | 36. 黑色地黒土質上層 | 54. 茶褐色地黒土質 | |

北壁土層說明

- | | | |
|--------------------------|-------------------------|----------------------|
| 1. 純色土層 | 21. 暗紅色粘質土層 (後生熱帶遺物包含層) | 41. 鐵銹色粘質土層 |
| 2. 底土層 | 22. 墨綠色砂質黏土層 | 42. 淡黃色砂質黏土層 |
| 3. 黃色粘質土層 | 23. 黑色砂質土層 | 43. 黑色土層 |
| 4. 黄褐色土層 | 24. 鐵銹色黃質土層 | 44. 鐵色砂質土層 |
| 5. 深黃色開裂粘質土層 | 25. 淡黃色砂質土層 | 45. 黑色砂質土層 |
| 6. 黄褐色粘質土層 | 26. 茶褐色粘土層 | 46. 黑色砂質土層 |
| 7. 深黃色沙質土層 | 27. 墓穴側面的粘質土層 | 47. 黑色沙質土層 |
| 8. 深黃色開裂粘質土層 | 28. 墓穴側面的土層 (中世期斷面土層) | 48. 黃褐色砂質土層 |
| 9. 黄褐色土層 | 29. 黑色粘質土層 (中世開闢穴壁土) | 49. 墓穴側面的土層 |
| 10. 純灰黑色土層 | 30. 黑色粘土層 | 50. 墓穴側面土層 |
| 11. 深灰黑色開裂粘質土層 | 31. 黑色開裂粘質土層 | 51. 淡黃色開裂砂質土層 |
| 12. 黑色沙質土層 | 32. 黑色粘質土層 | 52. 黑色粘質土層 |
| 13. 深黑色粘土層 | 33. 黑色沙土層 | 53. 黑色粘土層 |
| 14. 深黃色粘質土層 | 34. 淡黃色粘質土層 | 54. 深黃色開裂土層 |
| 15. 深黃色開裂粘質土層 | 35. 黑色粘土層 | 55. 淡灰黑色土層 |
| 16. 深黃色開裂粘質土層 | 36. 青灰色粘土層 | 56. 深茶色土層 |
| 17. 深黃色粘質土層 | 37. 黑色粘質土層 | 57. 深黃色粘質土層 |
| 18. 黑色砂質土層 | 38. 黑色砂質土層 | 58. 黃色開裂粘質土層 |
| 19. 深黃色粘質土層 (後生熱帶遺物包含層) | 39. 黑色粘土層 | 59. 黑褐色土層 (S101回填土層) |
| 20. 黑色粘質土層 (.....上.....) | 40. 黑色沙質土層 | 60. S101山牆外側的黑褐色土層 |

第4図 調査区北・西壁土層断面図 (1/50)



第5図 調査地遺構全体図 (1/50)

2. 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は、弥生期の土塙がその主体であり、多くの遺物の出土をみた。その他平安時代の土塙も検出されたが、次いで多いのは、中世期の遺構である。中世期では曲物を井筒に用いた井戸と東西に流れる河川があげられる。

以下、構造別に解説を加えておくこととする。

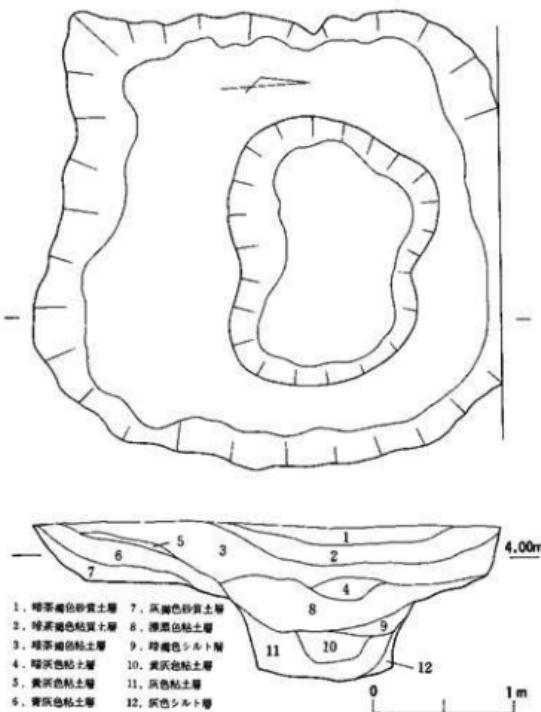
SK01 (図版2-1) 調査区北西部で検出された平面不整方形を呈する土塙である。規模は、北側が調査区外に、西側はSK06によって切られるため、正確な数値は不明であるが、凡そ東西3.2m、南北3.3mを計測する。中央部分には更に東西1.9m、南北1.5mほどの掘り込みが認められる。深さは掘り込み面より段掘りのテラス部分まで平均0.5m前後、最深部分で約1.4~1.5mを各々測る。中央部分は、調査前に行われていた基礎工事ボーリングによって土層観察を行った。

土層は植物遺体等の有機物を多量に含む粘質土層で、下層ほど粘性が高くなる。色調は暗褐色~漆黒色を呈す。

遺物は堆積土上層から中層まで多量に包含されていたが、最下層のみは、木枝・葉等、自然遺物が大半で土器の混入は少なかった。又、上層は細片かつ保存状態の悪い遺物が多いのに対し、第8層を中心完形品を含む大型の破片が顕著に認められた。

SK02 (図版2-2)

調査区南西端に検出した土塙である。その大半は調査区外にのびるため、規模等は不明である。しかし検出部分から判断して、ほぼ円形を呈するものと思われる。



第6図 SK01平面図・土層断面図

掘り込み面からの深さは、0.25mほどで緩やかな掘り鉢状を呈する。

覆土は、上面の包含層とほぼ同様で、黒色の粘質土層である。北側肩部よりほぼ完形の甕が検出された。

SK03 (図版3-1) 調査区南で検出された土塙である。東西1.8m、南北1.8mのほぼ円形を呈する。中央部分には更に東西1.0m、南北1.1mのほぼ円形を呈する掘り込みがみられる。この土塙は包含層下層より切り込まれており、深さは掘り込み面より段掘りのテラス部分まで0.35～0.4m、最深部分で約1.2mを各々測る。

堆積土は、黒色の粘質土で植物遺体を多く含んでいる。

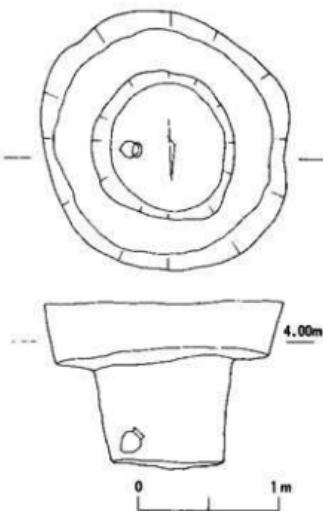
遺物は特に段掘り部分から集中的に検出された。この中には、直口壺(第14図-1)の様に意識的に口縁部を打ち欠いたとみられるものも存在する。又、床面直上ではほぼ完形の甕一点を検出した。

SK04・05 (図版3-2)

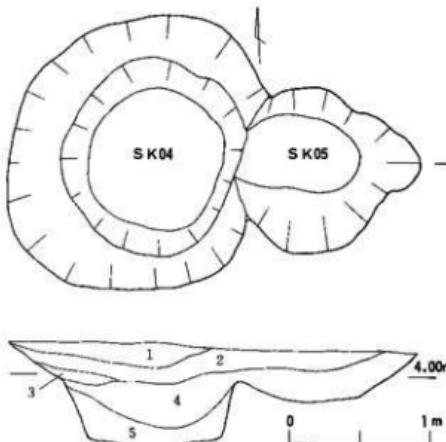
調査区中央で検出された土塙である。東西約1.7m、南北1.9mを測る土塙SK04と東西約1.2m、南北1.2mを測る土塙SK05が東西に接続した形状を示している。これら2つの土塙は、土層の堆積状況から観て切り合い関係は認められない。

SK04はほぼ円形を呈し、深さ0.75mほどを測る。掘り方は、二段掘りの形状を呈す。

SK05は不正円形を呈し、SK04より浅く0.35mほどである。



第7図 SK03平面図・立面図



1. 黒褐色粘質土層 4. 茶褐色粘質土層
2. 暗褐色粘質土層 5. 黑褐色シルト層
3. 黒色粘土層

第8図 SK04・05平面図・土塙断面図

堆積土層は黒色粘土層で、下部はシルト質である。

S K04では遺物は、上層から甕、壺、高杯などが一括出土した。

S D01～04 S K01及び04に挟まれた区域で、合計4条の溝跡を検出した。

S D01は幅0.3m前後の直線的に走る溝で、長さ5.5mを調査した。深さを0.05m～0.1mほどの非常に浅いもので、底面には浅い小ビットが多く見られ凹凸が激しい。

これと2.7m間隔を保ちほぼ平行に走る溝S D04も同様の形態を呈する。本溝は西側をSK01に、東側をSK04にそれぞれ切られている。

S D02は、これより幅がやや広いものでSD03を切り、SD04によって切り込まれている。

これら4条の溝の埋土は、いずれも近似した暗灰色シルト質の土層で、微細な土器破片が少量含まれていた。又、これらは、切り合ひ関係から、SD03—SD02—SD04 (SD01)—SK01、SK04という変遷が迫れる。

弥生期の遺構としては、以上その他に、数10個のビットが存在する。しかしながらこれらは一定のまとまりなどは認められず、建物などにはならない。これらには、七器細片が若干含まれていたが、図示し得たのはP1のものである。

S K06 (図版4-1・2) 調査区北西端で検出された不定形の土塁は調査区外に大きくのびるものと思われる。現状では南北約4.0m、東西約2.0m、深さ1.1mほどを計測する。掘り込みは緩やかであるが、一部底面には抉れた部分も存在する。又、底部には、直径5cmほどの木杭の打ち込みがみられた。

堆積土は荒砂層とシルト・粘土層などが薄い互層をなしており、底面には有機物の多い粘土層が溜っていた。

遺物は、弥生後期包含層及びSK01を切り込んでいるため、弥生土器の破片が多数混入していた。本土塙に伴う遺物は、中層から下層にかけて多量に認められた。これらには黒色土器、土師器、須恵器等が認められ、中には完形近く復元しうるものも含まれていた。又、出土状況から観て、何回かにわたり投棄されたものと思われる。

S E01 (図版5-2、6-1・2、7-1・2) 1.9m×2.1mのほぼ円形の掘り方を有する井戸である。底面から1.4m前後の部分で僅かに段をなす所謂一段掘りの形態をとっている。底面での径は0.9mを計測する。深さは現状で2.0mを測るが、これは上部を重機により掘削しているためで、本来は2.5mほどの深さを有したものと考えられる。

井筒は曲物を四段積み重ねたもので、その直上に一辺0.7mの方形の井戸枠を組んでいる。井戸枠側板には、幅5cmほどの板材を縦組にしている。この縦板材上部は、既に腐朽しきっており、最上部の構造は不明とせざるを得ない。しかしながら、縦板個々の下端部分は枠材に固定されておらず、枠材の外側に沿って差し込むだけという脆弱な構造をとっている。なおかつ縦板材は非常に薄いものである点を考慮すれば、その強度の面からみて、上部を横棟により固

定していなければ、土圧により内側に崩壊する恐れが充分考えられよう。これら縦板材は七層観察から、少なくとも1mほどの高さはあったとみられる。又、部分的ではあるが、長さ0.9mほど残存する縦板材には横桟の痕跡は認められず、これより上部に枠組が設置されていた可能性が高い。下段に残る横桟は、枘を切って組み合わされ、釘などは使用されていない。

井筒は、曲物を4段積み重ねている。曲物は4個体共に径30cmほどの大きさである。これらの曲物は、1・3段目のみ器高の高いものが使われている。つまり器高の高いものと低いものとを交互に積んで井筒を作っている。曲物4段の総高は85cmを計測する。

曲物にはその積み重ね部分に、更に外側から別の曲物薄板を回し、木釘乃至植物纖維により留めている部分が観察される。これは、曲物自体の径がほぼ同じで、それぞれ嵌め込んで固定することが不可能なため、土圧などによる横方向へのズレを防止するためになされた処置と考えられる。

又、曲物本体の皮縫じ部分には、幅5cm、長さ20ほどの薄く割った板材をあてがい、その上下端を木釘で留め補強を行う部分も存在する。

曲物第1段目は、掘り方底面より更に10cm、約半分ほど埋め込まれている。埋め込まれている層（灰色細砂層）は、現状でも一番湧水が激しく、恐らく本井戸構築時もこの層が湧水層であったと考えられる。

掘り方内は、一旦掘られた土を埋めもどしたもので、掘り方法面に見られる各七層がブロック状に混じりあっている。特に井筒曲物上段までは一気に埋め込まれ、その後、横桟・縦側板が設置されている。

横桟組と曲物上段の間部分には、まず厚さ5~6cmほど灰色荒砂を敷きつめ、更にその上面に白色細砂を敷いている。

井筒内には灰色砂層、シルト層などが溜っていた。

又、方形木枠内は、井戸廃棄時に一気に埋め込まれた状況を呈している。

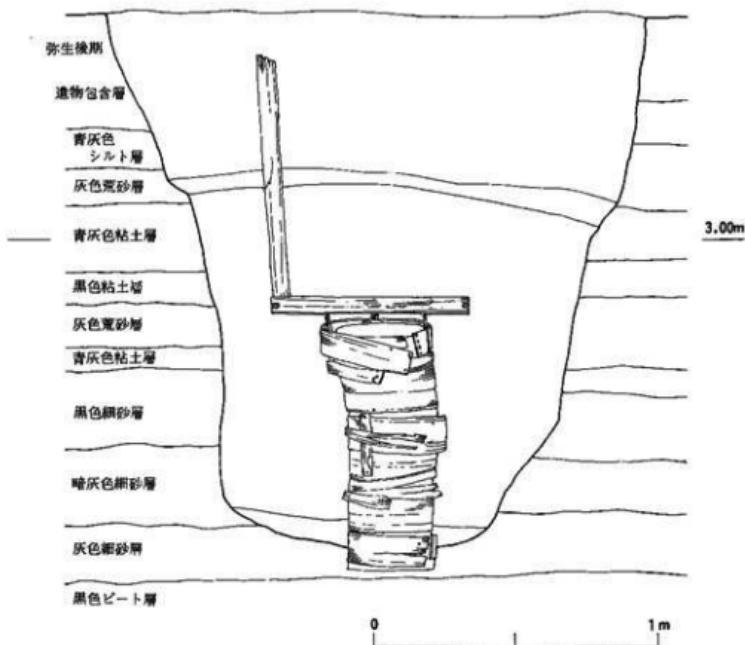
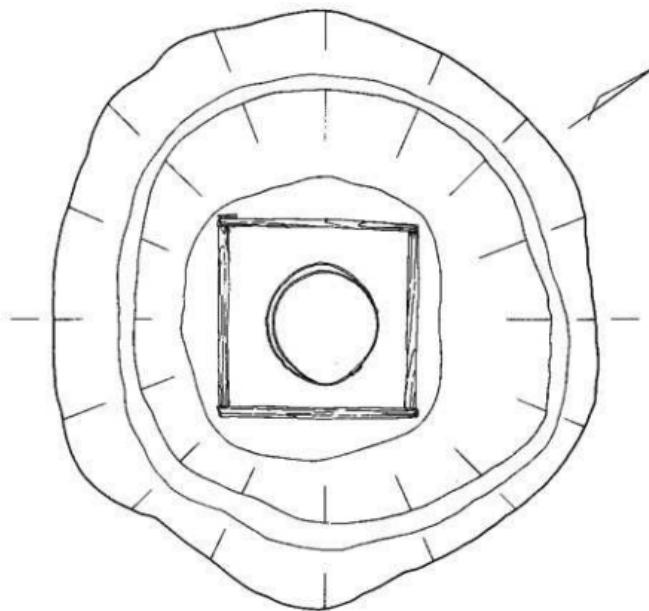
遺物は掘り方内より瓦器碗、土師器皿、鍋などが多く検出されたが、何れも細片である。井戸枠内よりは、曲物井筒上面で白磁の細片一点が採集された。又、ほぼ一個体分の曲物が押し潰された状態で出土した。井筒内最下部では、瓦器碗、瓦質足釜などが検出された。

これらの他に、掘り方埋め土内には、多くの弥生土器が包含されていた。

S K07 直径1.3~1.4mの円形土塹である。堆積土は、黒色粘土、灰色シルトなどで、下層には荒い灰色砂層が見られる。

遺物は非常に少なく、かつ細片が多いが、土師器、瓦器等が検出された。

S D05 (岡版5-1) 調査区北側を東西方向に流れる河川と考えられる。約10mほどを検出したが、幅は不明である。土層の断面観察によると少なくとも4回にわたって改修がなされている。これによって浅くなったり河を掘りなおしているが、川幅は徐々に狭くなっている。又、



第9図 SE01平面図・立面図

最終時には、岸に約1m間隔で木杭が打ち込まれている。

堆積土層は砂層、シルト層、砂礫層などが互層をなしているが、全体に荒い砂が大量に堆積している。この状況からみて比較的流れが強かったものと思われる。

河川からは、多数の遺物が出土している。瓦器楕・土師皿が最も多く、羽釜・足釜などが含まれている。

調査区外検出井戸（図版8-1・2）発掘区の北側で行われていた建物基礎工事中、掘削面に羽釜が検出され、急掘、造構の実測及び遺物の取り上げを行った。

層位は、盛土下に旧水田耕土があり、その直下より厚さ20cmほどの中世期の遺物包含層が二枚存在する。本井戸はその下層上面より切り込まれており、平面プランはほぼ円形を呈するものと思われた。掘り方の直径は上面で約50cm、下面で約40cmをそれぞれ測り、深さは約60cmほどである。その構造は、中に底部を打ち割った羽釜を2個体、倒立させた状態で積み重ねたもので、それ以外に木枠等で補強されておらず、極めて簡単なものである。

（木下）



第10図 調査区外検出井戸実測図

第Ⅳ章 出土遺物

1. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物の大部分は弥生土器である。弥生土器は各土塚より豊富に検出された。これ以外に、平安期の土師器及び須恵器、中世期の瓦器、土師器、須恵質土器等が主なものである。以下、造構毎に出土遺物を解説していく。

(木下)

SK01 (第11・12図・図版9・10-8) 1は復元口径24.5cmを測る広口壺の口縁部である。短く外反する頸部に粘土を付加し、垂下させている。外面には櫛描波状文・円形浮文を施す。2は復元口径22.5cmを測る二重口縁の壺である。口縁は大きく外反した後、屈曲して上外方へやや外反させ端部は丸くおさめる。外面には櫛描波状文を組み合わせ、頸部には刷毛の後に縱方向の蒐磨きを加える。内面上半は撫で仕上げ、下半は刷毛を撫で消している。3は復元口径20.0cmを測る広口壺の口頸部である。外反する頸部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部は肥厚させ、面をもつ。口縁部外面は櫛描波状文と円形浮文で飾り、頸部は蒐撫で、内面は端部は横撫で、それ以下は横方向の蒐磨きである。4は二重口縁の壺であり、外傾する頸部から水平に伸び、下端をやや垂下させ、粘土を付加して外反する口縁を作る。口縁端部はやや上下に肥厚させて面をもつ。頸部と口縁部の境と口縁端部に円形浮文を3個1組に巡らせ、頸部以下は縱方向の蒐磨き、内面は横方向の蒐磨きである。復元口径は20.0cmを測る。色調・胎土から河内からの搬入品と考えられる。5は広口壺の口縁部で復元口径19.0cmである。外反する口縁部に粘土を付加し、端部を上下に拡張する。端部外面は櫛描波状文と2個1対と思われる円形浮文を巡らせ、頸部は縱方向の蒐磨きを加える。内面は磨滅が激しく調整不明。6は二重口縁の壺で外反する頸部に屈曲して外反する口縁を付加し、端部は面取りする。口縁下部に櫛描波状文2列と円形浮文を施す。外面は施文部より上は横撫で、以下は縱方向の刷毛の後、横撫でを加える。内面は縱方向の蒐磨きの後、口縁部に櫛描波状文を2段巡らす。復元口径は26.0cmである。7も広口壺で外反する口縁端部を肥厚させ、やや上下に拡張し、面をもつ。その面に櫛描波状文を施し、頸部にかけては縱方向の蒐磨きがみられる。内面は撫で仕上げ。復元口径は14.3cmである。8は外反する口縁部で端部を肥厚、垂下させた広口壺である。端部外面に3条の凹線が施され、他は内外面とも強い横撫でがなされている。全体に磨滅が激しい。9は広口壺の口頸部である。直線もしくはやや外反気味の頸部から大きく外反する口縁部をもち、端部は上外方へつまみ上げ、面をもつ。端部外面は櫛描波状文が施され、頸部は縱方向の刷毛、指頭圧痕がみられる。外面は横方向の蒐磨きである。復元口径は20.5cmである。10は外反する口

縁部をもち、端部を肥厚し、垂下させた広口壺である。端部外面は2段の不明瞭な凹面をもち、以下は刷毛の後撫でにより仕上げる。内面は撫で仕上げ、復元口径は13.4cmである。11は大きく外反する口縁の端部をやや肥厚させ、上下に拡張する広口壺である。端部外面下端に刻み目を施す。その他は横撫でがなされ、復元口径は14.5cmである。12は壺の肩部～口縁部で、頸部内面に明瞭な稜をもち、外反する口縁の端部はやや内傾させてつまみ上げる。口縁部外面は横撫で、内面は横方向の蒐磨き、頸部以下外面は叩きの後撫で仕上げ、内面は蒐削りである。13も壺の肩部～口縁部である。やや肩の張った体部から頸部はわずかに外傾し、そのまま外反する口縁部となる。端部はやや上方へ肥厚させて面をもつ。口縁部内外面は横撫で、頸部以下外面は刷毛、肩部はその後縦方向の蒐磨きが加えられ、内面は頸部以下に指頭圧痕が多く残す。14は13と類似した壺であるが、肩の張りは少なく頸部内面に明瞭な稜がみられる。頸部はやや外反しながら口縁部へつながるが、端部は極めてわずかに肥厚し、面をもつ。口縁部内外面は横撫で、頸部外面は刷毛、体部内面には指頭圧痕がみられる。15は復元口径13.0cmの壺の口頸部である。大きく外反する口頸部で、端部はやや内側へつまみ上げ、面をもつ。端部内外面は強い横撫で、口頸部外面は、刷毛の後縦方向の蒐磨きが施され、体部との境では強い横撫でがみられる。内面については、体部は横方向の蒐削りがなされている。16は体部下半が欠損している壺である。肩はなだらかで、胴中位以下に最大径をもつと思われる。「く」字状の頸部をもち、やや外傾する口縁部で、端部は面取りする。口縁部内外面は横撫で、頸部以下は外面に横方向の蒐磨き、内面に横方向のシャープな蒐削りが施される。17は体部下半を欠損した壺である。最大径は胴中位にあり、肩は張らない。「く」字状の頸部から外傾する口縁部で端部はそのままつまんで終わる。口縁部内外面は強い撫で仕上げ、頸部内面の稜はシャープさを欠き、体部外面は刷毛の後に撫で、内面は横方向の蒐削りと思われるが、磨滅が激しく不明確である。

18～31は底部の破片で全て平底である。壺の底部と思われるが、器種については不明確なものも存する。18は体部下半～底部で、残存高5.0cm、外面は刷毛後蒐撫で、内面は体部下半以上に蒐磨きが施される。19は厚い平底で、外面は蒐撫で、内面は蒐削りである。20は外面は蒐撫での後撫で仕上げ、内面は底部付近に刷毛を施した後に撫でて仕上げる。21は底部を突出させ、底部中央に凹面をもつ。底部外面に指頭圧痕を残すが他は蒐磨きを施す。22も突出した底部をもつが、安定性を欠く。底部外面に指頭圧痕を残すが、体部下半は蒐撫で、内面は撫で仕上げである。23は突出しない底部をもち、外面は底部に指頭圧痕、体部下半は蒐撫での後に撫でて仕上げ、内面は底部付近にくもの巣状の刷毛、体部下半以上は刷毛の後撫で仕上げである。外面に一部黒斑がみられる。24は厚い突出した底部で、外面は底部付近は蒐撫で、体部下半は粗い蒐磨き、内面は底部に刷毛を残す。25も突出した底部で、中央に凹みをもつ。底部外面に指頭圧痕を残す。27は突出しない底部で、外面に蒐撫での痕跡を残し、内面にはくもの巣状の刷毛を施す。28は大きく突出させた底部で、外面に指頭圧痕が2段みられ、体部下半は縦方向

の箝磨きである。内面は底部にくもの巣状の刷毛、体部下半は粗い箝削りが施される。29は突出した底部の中央に凹面をもち、体部下半は叩き痕を残すが底部までは及ばない。内面は、くもの巣状の刷毛が底部にみられる。30は木葉痕を底部に残し、外面の縦方向の箝磨きは底部まで及ばない。内面は粗い箝撫で施される。31は小さい突出した底部をもち、外面に指頭圧痕、体部下半は縦方向の箝磨きが施される。

32は鉢の下半である。外面は、体部は横方向、下端に縦方向の箝磨き、体部と底部の境に指頭圧痕が施される。内面は、体部に縦方向の箝磨き、底部付近は後に撫で消している。底部には化粧土が薄く施されている。

33は完形の長頸壺である。胴中位に最大径をもつ胴のやや張った感じのもので、突出した平底を呈す。口頭部はやや外傾したち内弯して端部は丸くおさめる。外面は口頭部に縦、胴部上半は不整方向、下半は横、底部付近にかけては斜方向の箝磨き、底部は箝撫でが残る。口頭部内面に箝削りの痕跡をわずかに留める。34も完形品で、小形の壺である。底部は大きめの平底で木葉痕を残し、体部は張らず、「く」字状にくびれた頸部から外反し、口縁端部はそのままつまんだ状態で終わり、面をもつ。口頭部内外面は横撫で、内面は底部付近に箝撫でがみられ、胴部は内外面ともに粘土痕が明瞭である。

35～38は底部の破片である。35は大形の平底の壺と考えられる。外面は縦方向の箝磨き、内面は縦方向の箝撫でを施す。36は突出した平底で、木葉痕を残す。外面の叩きは底部まで及び内面は横方向の箝磨きが施される。37はミニチュア壺の底部と思われ、底部に凹面をもち、外面下端に指頭圧痕を多数残す。39はミニチュア土器で、体部外面は箝削りの後に横方向の撫で仕上げ、指頭圧痕を多く残す。底部は撫で仕上げ。内面は底部付近を指でおさえた後、横方向の強い撫で仕上げで、それ以上は不定方向の強い撫で仕上げである。

40～53は甕である。40は「く」字状に屈曲した口縁部が外反し、端部に面をもつ。体部上半に叩きがみられるが、後に撫で消している。それ以外は磨滅が激しく調整不明である。41は口径が体部径より大きいもので緩やかに外反した口縁部は端部で上方にやや鋭くつまみ上げ、面をもつ。体部外面は右上がりの叩きの後撫で消し、口縁部外面及び内面全体は撫で仕上げである。復元口径は10.0cmである。42は復元口径11.0cmで磨滅が激しく調整は不明瞭である。「く」字状に屈曲し、やや内弯気味に立上がる口縁をもつ。端部は丸くおさめる。全体に粗い叩きを施した後、絞って口縁部を作り出している。その後全体に亘って強い撫で仕上げを施す。口縁部内面は強い撫で仕上げ、体部内面は横方向の箝削り後、撫で仕上げである。43は「く」字状に屈曲し、更に内弯させた口縁部をもつ。端部はやや肥厚させている。口縁部内外面は撫で仕上げ、体部外面は右上がり叩き、内面は箝削りである。角閃石を多数含み、生駒西麓産の土器である。44は緩く「く」字状に外反する口縁部をもち、端部はそのまま小さい面をもって終わる。口縁部内外面及び体部内面は撫で仕上げ、外面は口縁部まで叩きが施され、一部撫で消さ

れている。口縁部内面端部付近に黒斑がみられる。45は「く」字状に外反する口縁部で端部は丸くおさめる。くびれ部内面に稜はもない。体部外面には叩きが施されるが、頭部では撫で消される。口縁部内面上半及び口縁部外面は撫で仕上げ、口縁部内面下半は刷毛後撫で、体部内面は板撫でが施され、一部に窓状工具痕が残る。復元口径は12.8cmである。46は緩く外反する口縁部で端部を上下にやや肥厚させる。体部外面は叩きの後撫で消してあり、頭部に絞り痕を残す。内面は口縁部が窓撫で、体部は粗い窓削りである。47は「く」字状に外反する口縁部で端部は丸くおさめる。くびれ部内面に鋭い稜をもつ。体部外面は叩きの後に撫で消し、内面は粗い刷毛、指頭圧痕がわずかにみられる。復元口径は15.8cmである。48は緩く外反する口縁部で端部はやや肥厚させ、面をもつ。体部外面には叩きを施すが、後に撫で消す。くびれ部に粘土の接合痕を残す。その他は撫で仕上げである。復元口径は14.0cmで、体部最大径より大きい。49は復元口径14.7cmを測り、口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部は面をもつ。体部外面には細かい叩きが施され、口縁部内外面は撫で仕上げ、体部内面は粗い刷毛が施される。50は「く」字状に大きく外反し、更に上方外へ屈曲させてつまみ上げた口縁部をもつ。口縁部内外面は撫で仕上げ、外面は口縁下端から体部にかけて刷毛がなされるが、くびれ部以上は強く撫で消している。体部内面は横方向の窓削りの後撫で仕上げ。復元口径は16.0cmである。51は体部下半を欠損している。体部中位に最大径をもち、「く」字状に大きく外反した口縁部は屈曲して更に短く外反し、端部は丸くおさめる。口縁部屈曲部分の内面に凹みをもつ。口縁部内外面は撫で仕上げ、体部外面は上半は右上がり、中位は縱方向の叩きが施され、内面は窓削りがなされる。復元口径は14.8cmで体部最大径を上回る。52は体部中位に最大径をもつもので、「く」字状に外反する口縁部の端部を上方へつまみ上げて肥厚させる。口縁部内外面は撫で仕上げ、体部外面は叩きを施すが、一部は後に刷毛によって消されている。口縁部及び体部中位に煤が付着する。体部内面は窓状工具の痕跡が上方に、接合痕が中位に残る。復元口径は14.5cmである。53は復元口径14.3cm、残存高9.3cmを測り、体部下半以下を欠損。外面は全体に右上がりの叩きが施され、口縁部は更に撫で消している。内面は、口縁端部とくびれ部直下に指頭圧痕を残しているが体部大半は縱方向に刷毛を施す。体部最大径は12.2cmを測り、口縁部の方が大きい。

54~60は底部の破片である。甕の底部で、全て平底である。54は小さく突出した底部をもち、外面は下端まで叩き、内面は窓削りが施される。55は底部中央に凹みをもち、外面は窓撫での後、底部付近に叩きを若干残す。内面は底部にくもの巣状の刷毛、それ以上は刷毛がなされる。56はやや突出させた底部で、中央に小孔を穿つ。外面は下端まで叩きが施され、その後窓撫及び撫でによって仕上げる。内面は底部付近にくもの巣状の刷毛、それ以上は撫で仕上げである。57は小さく突出した不安定な底部をもつ。外面は、底部付近まで叩き、内面は底部付近にくもの巣状の刷毛の後に撫で仕上げ、それ以上は刷毛の後、撫で仕上げである。58は底部中央

に明瞭な凹みをもつ。胎土と色調から生駒西麓産の土器である。外面は全面右上りの叩き、内面は底部付近に指頭圧痕、体部下半に竪状の工具で縦にひっかいたような痕跡がみられる。59は小形品の甕で底部中央に凹みをもち、その部分は未調整、底部の他の部分は撫で仕上げである。下端には指頭圧痕がみられる。内面は撫で仕上げで、一部指頭圧痕を残す。底部に黒斑が認められる。60も底部中央下に凹みをもち、体部外面は下端まで叩きが施される。叩きは下半身までは粗い右上がりの叩きでそれ以上はやや細かく右上がりの傾きが少ない叩きである。内面は底部はくもの巣状の刷毛、その他は刷毛がなされる。

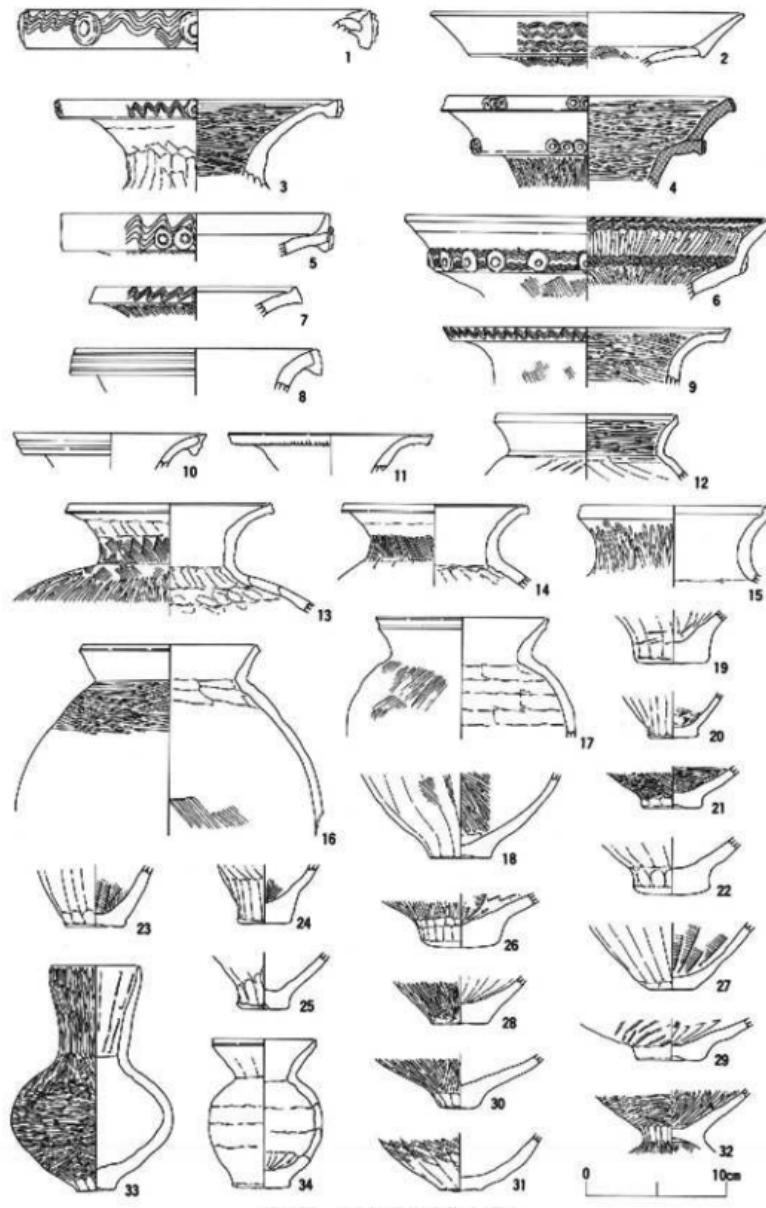
61は高杯の杯部で、口径は23.5cmで浅い皿状の杯部に大きく直線的に伸びながら外傾する発達した口縁部を有する。端部は丸くおさめる。杯部外面の稜は明瞭であるが、内面の稜は不明瞭で、全体に内外面に細かい刷毛を施す。尚、内面下半に赤色顔料が付着している。

62~69はいずれも高杯の脚部である。62は短い中空の柱部から屈曲して裾部を作る。内外面は蒐撫でによって仕上げる。63も短い柱部をもち、屈曲した裾部は内弯する。外面は蒐撫での後、裾部では蒐磨きされ、裾部内面はくもの巣状の刷毛がなされる。64は中実の柱部から緩やかに広がる裾部をもつ。外面は蒐磨き、内面は撫で仕上げである。65は中実の柱部で、裾部は屈曲して「ハ」字状に開く。裾部に透孔を4孔穿つ。外面は蒐磨き、内面は裾部に撫で仕上げが施されている。絞り痕を残す。その形状から挿入付加法をとるものと思われる。66は短い中空の柱部で緩く屈曲して広がる裾部を作る。裾部に透孔を4孔穿つ。外面は蒐磨きされ、内面に絞り痕を残す。67は太く内弯気味の柱部をもつ。外面は蒐撫され、内面に絞り痕を残す。生駒西麓産の土器である。68は中実の太い柱部で、裾部は屈曲してやや短く外反するものである。裾部には3つの透孔を穿ち、外面は蒐磨き、内面に絞り痕を残す。67と同じく生駒西麓産の土器である。69は中実のスマートな柱部で、裾部は緩く外反する。柱部上半外面にわずかに刷毛を残すが全体に蒐磨きされ、内面は撫で、一部指頭圧痕がみられる。杯底部には細かい蒐磨きがなされる。円板充填法による。

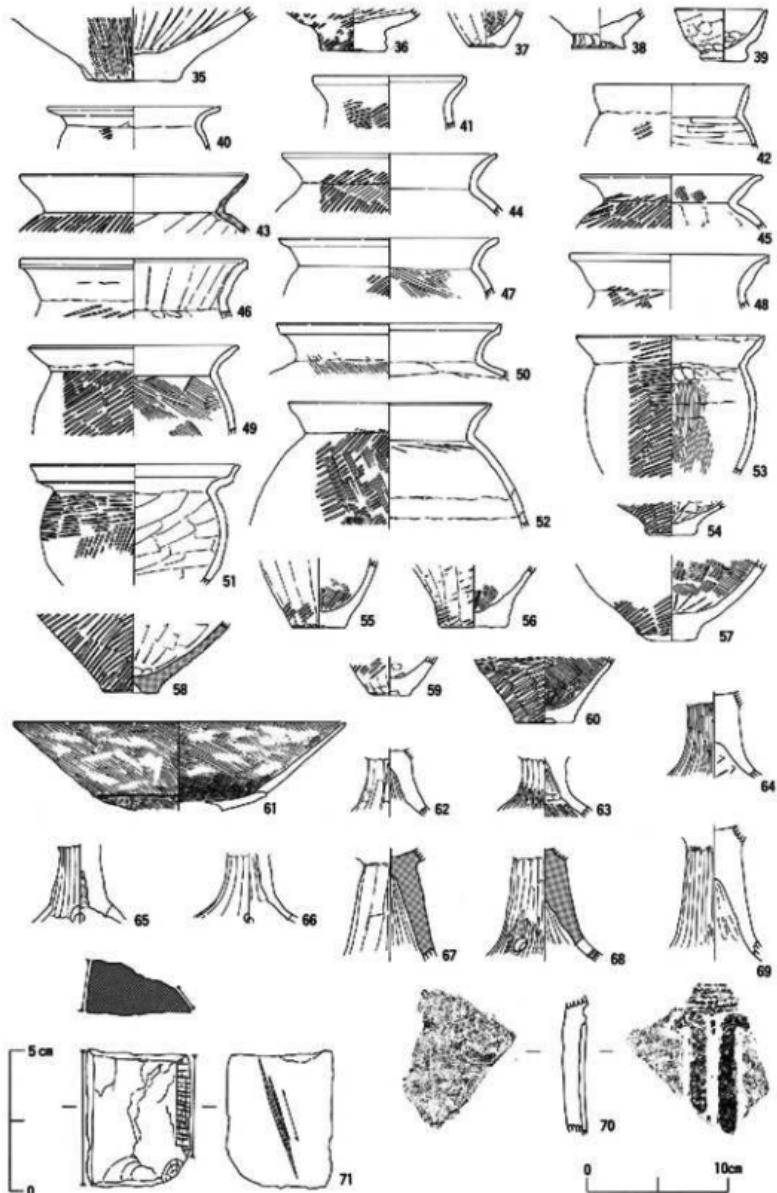
70は2本の凸線の下に蕨手状の浮文を貼りつけたもので、2個を背中合わせにしている。その他は内外面とも刷毛を施す。器種については不明である。71は用途不明の石器である。長側面には長軸方向に削痕が走り、部分的に砥石として使用された箇所もある。上端は折損しており、下端は、敲打痕が残っている。又、一面には筋状に擦った部分が存在する。岩質は粘板岩系のもので暗灰色を呈している。

以上がSK01からの出土遺物であるが、埋土内の一括出土で、時期的には庄内期の古い段階に相当する。丸底化傾向は図示し得た遺物からは顕著ではないが、61の高杯のように新しい段階のものも混在する。

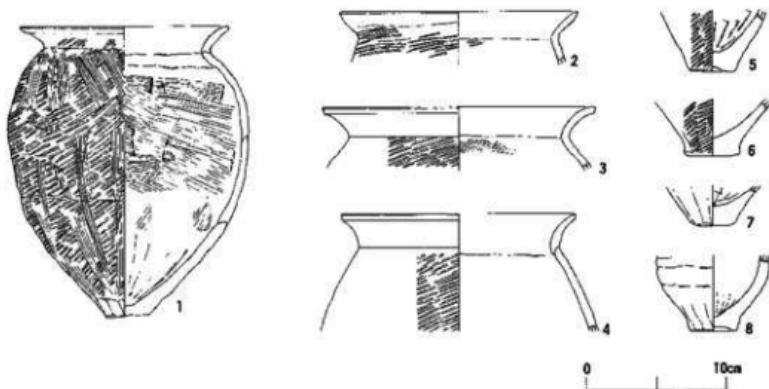
(須藤)



第11図 SK 01出土遺物実測図



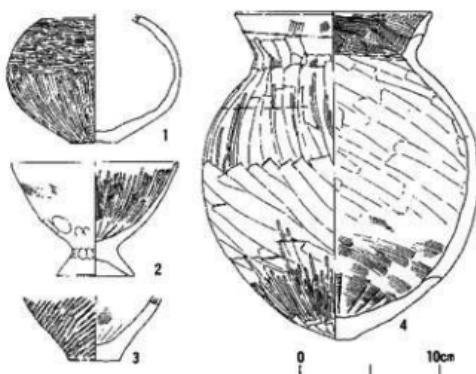
第12図 SK01出土遺物実測図



第13図 SK 02出土遺物実測図

SK 02 (図版10-1) 本土坡からは罐類が多く検出された。1はほぼ完形の甕で口径14.8cm、底径3.0cm、器高20.6を測る。胴部最大径はやや上位にある。外表面は右上りの叩きが施された後に、底部を中心に放射状の刷毛の調部中位まで粗く施される。又、肩部にも右下りの刷毛が粗く施されている。内面は上半をやや左上りの横刷毛調整、下半は縦刷毛を行っている。底部は板撫でを行う。外表面には厚く煤の付着がみられる。外面及び内面に接合痕を明瞭に残している。2～4も同様の甕である。口径は16.8cm、19.4cm、16.6cmをそれぞれ測り、2と4は耳が張らない。5・6は甕底部片、7・8は甕底部破片である。8は外面は撫でにより調整されると、接合痕を明瞭に残している。

SK 03 (図版10-2-3) 本土坡からは堆積土中層より一括して検出された。1は口縁部を意識的に打ち欠いたと考えられる直口壺で、扁球形の調部をもつ。底部は0.3cmを測る。最大径は胴部中位に存在する。保存状態が悪いため器面の剥落が著しいが、上半は横方向の尾磨きを、下半は縦方向の尾磨きを施し、平滑に仕上げている。2は台付鉢である。口径11.8cm、底部径5.4cm、器高2.1cmをそれぞれ測る。体部は外表面に細かな刷毛調



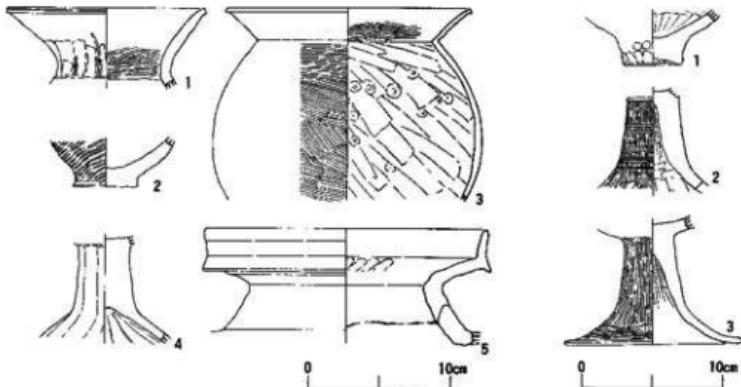
第14図 SK 03出土遺物実測図

整を行った後、撫でによって磨り消されている。脚台部との接合部分は指頭圧痕を多く残している。内面は細かな刷毛調整を施した後、縦方向に範磨きを行う。焼成は良好である。底部には板撫で痕を顕著に残している。3は甌底部破片で、外面には右上りの叩きを残している。4は底面直上からほぼ完形で検出された、口径14.0cm、器高23.4cmを測る甌である。脚部最大径は中位にあり、底部は尖り底を呈する。全体に器壁が厚手である。外面は上半部を縦方向に粗く削り、下半は右下りに削りを施す。底部を中心に放射状に比較的密な範磨きを施す。口縁部外面は粗い刷毛調整の後、横撫でによって刷毛目を磨り消している。内面は底部付近を横方向に板撫で調整、それより上部は範削りによっている。口縁部内面は横方向の粗い刷毛調整がなされている。又、この他に典型的な庄内甌が併出している。

これらの土器は胎土からみて、全て在地産と考えられる。

SK04 (図版10-4) 本土塙では比較的上面からまとまって遺物が出土した。1は口径13.8cmを測る甌口縁部である。2は甌の底部で外面には右上りの叩き痕を残す。3は庄内式の甌で外面は細かい刷毛調整を施す。肩部は横方向、それ以下は斜め方向である。内面は範削りにより棱は鋭く作り出されている。口縁部外面は横撫で、内面は横刷毛を残す。5は所謂吉備系の複合口縁の甌で、直立する口縁部に短くハの字形に開く頸部がつく。器面が荒れているが、調整は横撫でによっている。

SK05 本土塙からの遺物の出土量は少なく、図示し得たのは僅かに3点である。1は甌底部で底径4.0cmを測る。2・3は高杯脚部である。2は円形三方透しで、外面は縦方向の範磨きの後、2~4条・1対の沈線を三段に巡らしている。3は無窓で、脚柱部は縦方向、裾部は横方向にそれぞれ範磨きを行う。内面には紋り痕を残している。



第15図 SK04出土遺物実測図

第16図 SK05出土遺物実測図

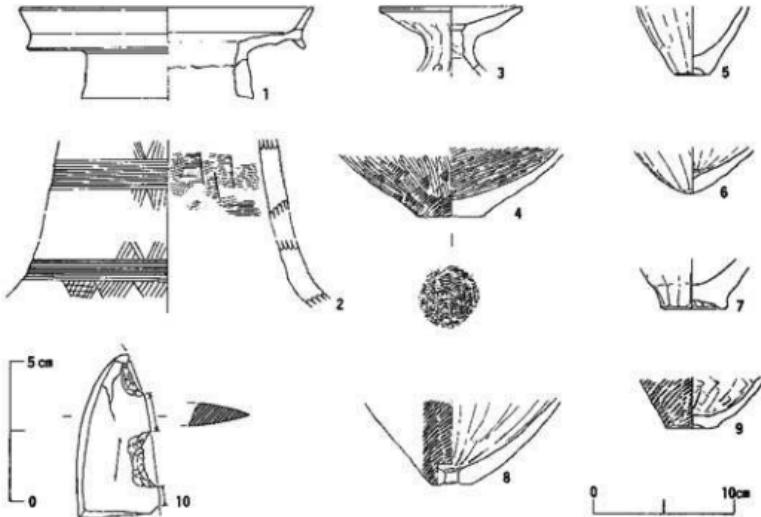
P 1 埋土から検出された高杯破片である。脚部は接合部から直線状にのび、襷部で屈曲する。襷には二方向に円形透しが配される。脚部外面は縱方向の窪磨きを施す。内面には絞り痕を残している。杯部は粗い刷毛調整である。

(木下)

包含層 (図版10-5~7) 1は壺の口頭部である。短く直立及至やや内傾する頸部から屈曲して大きく広がる口縁端に粘土を付加し、上下に拡張したもので、口縁上端は丸くおさめ、下端は面をもつ。内外面とも襷で仕上げである。内面には頸部と口縁部との境に明瞭な稜がみられ、頸部には接合痕が残る。口径は20.6cmである。吉備系のものであろう。2は壺の頸部と思われるもので、櫛描沈線が上段6条、下段5条施され、それらの上下は鮫齒文で飾られる。やや肩の張った体部から内傾した頸部をもつ。これも1と同様、吉備系のものであろう。3は口径9.8cmを測る器台である。やや外反した短い体部から内窓模様の受部をつくる。襷部には透孔をもち「ハ」字状に短く開くものと思われる。受部の端部に凹面をもち、全体に外面は窪撫で、内面は撫で仕上げである。4も壺の底部である。やや突出した平底をもち、網代模を残す。外面は底部まで叩きを施した後、縱方向の窪磨き、内面は斜方向の窪磨きが行われる。5は壺の底部であろう。底部に凹面をもち、外面は窪撫で、内面は撫で仕上げである。6もまた尖底の壺の底部破片である。内外面ともに窪撫で仕上げるが、外面の窪撫では底部には及ばない。7は底部である



第17図 P1出土物実測図



第18図 遺物包含層出土遺物実測図

が、器種については不明である。底部は広い凹面をもち、範状工具の痕跡がある。外面は下端に指頭圧痕が多く、それより上と内面は撫で仕上げである。8は盤の底部で、平底であるが、穿孔されている。明瞭な突出ではなく、体部へ緩やかにつながる。外面は全面に叩き、内面は縦方向の範削りである。9は甕の底部である。底面に凹みをもった平底で、外面は全面に叩きがなされ、内面は範削りである。

(須藤)

10は磨製石器の破片である。長側辺は薄く研ぎ出され、刃部をなしている。この形状からみて、磨製石剣の破片であると考えられる。刃部は断面レンズ状を呈する。

SK06 (図版11-1) 本土塚中・下層から多くの遺物の出土をみている。これらは黒色土器、土師器、須恵器など良好なセットをなしている。

1~17は黒色土器である。全てA類に属し、B類は含まれていない。高台には断面台形で高いもの、三角形を呈するがまだ高さを保っているもの、高台よりも底部が出てしまうものの三者が存在する。

ほぼ全体がわかるものについてみてみると、5は口径17.2cm、器高5.8cmを測り、台形の高い高台を有している。内面には横方向の粗い範磨きが施されている。15は、口径13.2cm、器高5.2cmを測るもので、高台よりも底部が出るものである。16も同様の高台であるが、器高は15よりも低い。

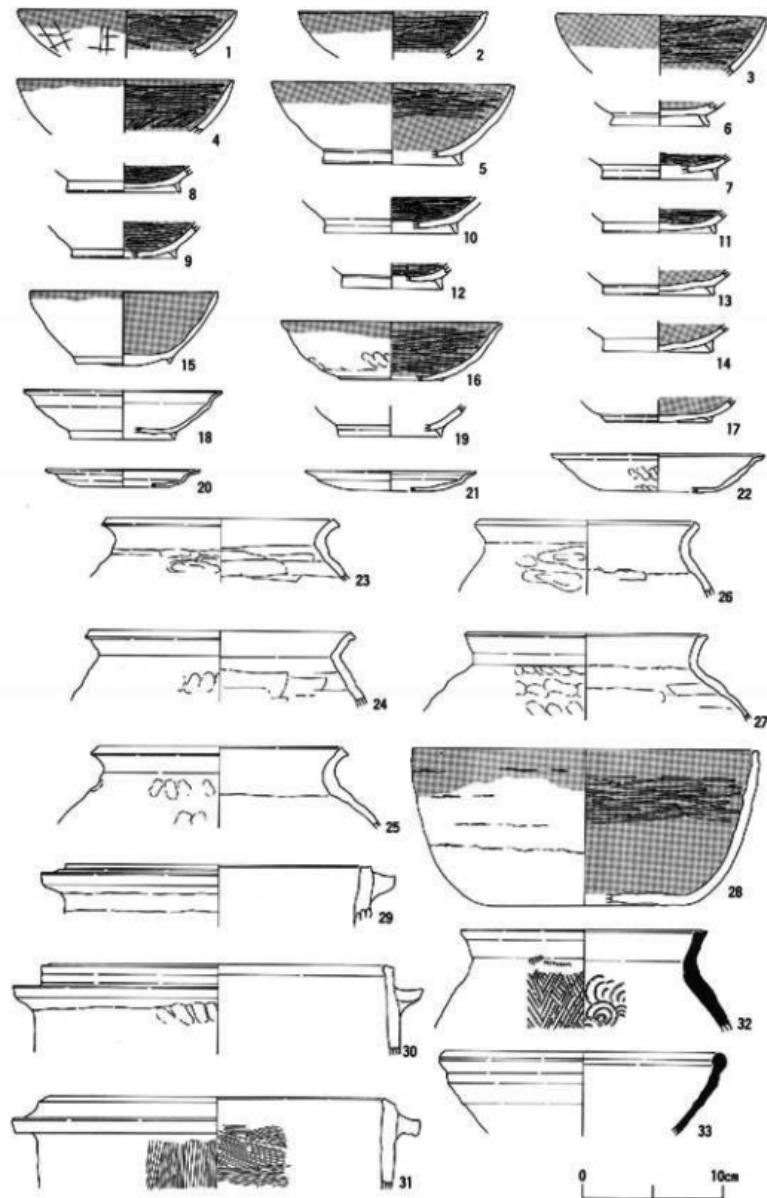
これらの黒色土器は内面の範磨きが粗く、粗雑な傾向が認められる。胎土は比較的細かく、精良な粘土が使用されている。この胎土からみて、全て在地産と考えられる。又、1の杯には焼成後、外面に線刻がなされている。

黒色土器では他の器種として、鉢が1点含まれていた。28は口径24.4cm、器高21.1cmを測るものである。内面には粗い範磨きが範に施され、外面には粘土帶のつなぎ目を明瞭に残している。

18・19は土師器杯である。断面三角形の高台に、大きく外方にのび口縁部で屈曲する杯部を有する。20~22は土師器皿である。20・21は口径11~12cm、器高1.2cmほどを測る小振りな皿で、口縁端部は上方に屈曲させている。22はやや大型の皿で、口径15cm、器高2.6cmをそれぞれ測る。23~27は土師器甕である。口径15~18cmほどを測る。体部内面は削り状の撫で、外面には指頭圧痕を顕著に残している。これらは茶褐色の胎土が用いられており、杯類とは異なる。29~31は土釜である。口縁部直下に断面台形を呈する鉢を付けたものである。内外面の調整は撫でによるものと刷毛によるもの二者が存在する。

32・33は須恵器である。32は甕で、短く直線的に外反する口縁部を有する。体部外面には平行叩き痕を、内面には青海波文をそれぞれ残している。33は鉢で、体部は内寄気味に外反し、口縁部は丸く肥厚しておさめる。

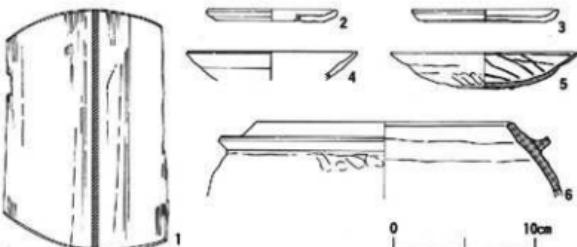
これらの遺物は概ね10世紀後半に比定しうる。



第19図 S K 06出土遺物実測図

SE01 (図版11-5~7)

井戸枠内出土のものを図示した。1は井筒上面で検出した曲物底板である。径17cm、厚さ4mmほどを計測する。僅かながら墨書きがみられるが、判読は不可能で

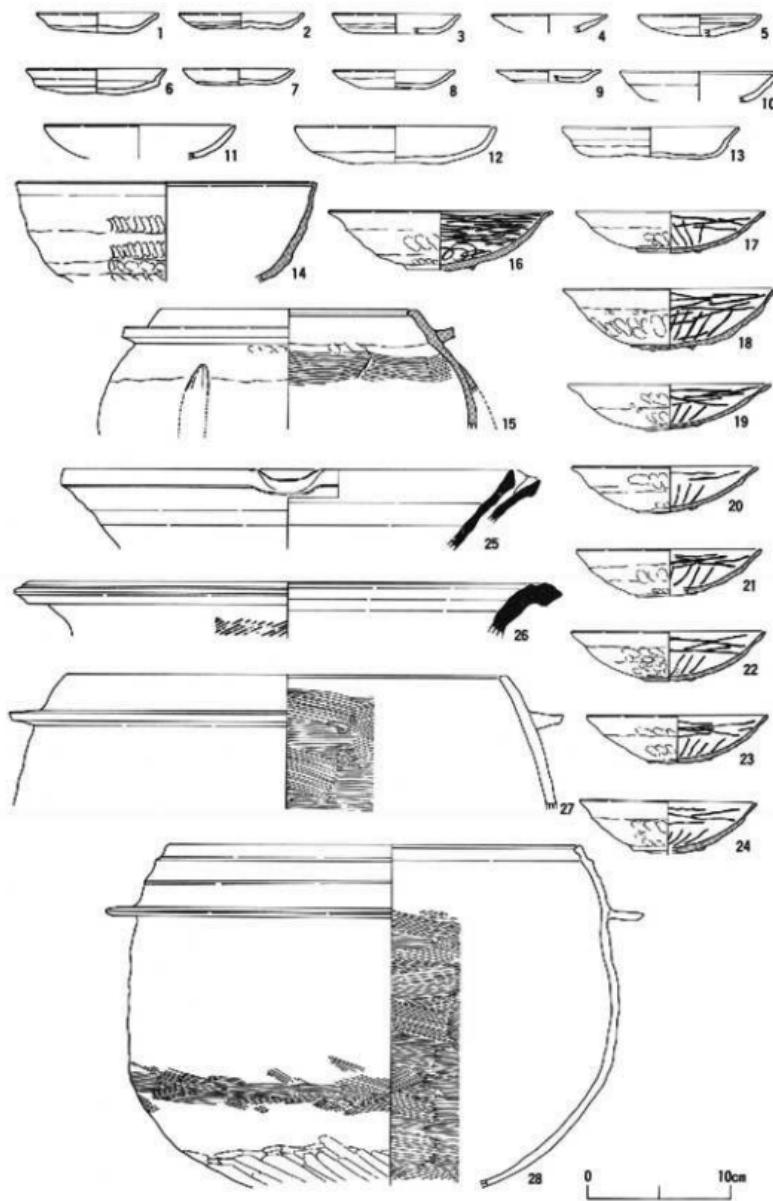


第20図 SE01出土遺物実測図

ある。2~4は土師皿で、浅いものと深いものの二種がある。5は瓦器碗で、底部には非常に低い粗雑な高台が付けられている。内面には平行線の暗文を、口縁部附近は横方向の暗文をそれぞれ施している。6は瓦質の足釜である。

SD05 (図版11-2・3・8) 河川内からは多くの土器が検出された。これはいずれも磨滅を受けておらず、ほとんど流されていないと思われる。これはほぼ完形に復元しうるものを含んでいることからも知ることができる。

1~13は土師器皿である。この内1~9は小振りのもので、口径は8.5cm前後、器高1.5cmほどである。10~13は口径11~14cm、器高2cm強を測る。14は瓦質の鉢で、口径20.5cmを測る。外面は指頭圧痕が明瞭に残り、内面は横撫でよっている。15は口径17.5cmを測る足釜で、口縁部は内傾し、端部内面を肥厚させている。鍔は断面台形を呈し、やや上方にのびる。足は欠損しているが三方に配されるものと思われる。16~24は瓦器碗である。16は口径15.8cm、器高4.2cmを測る。口縁部内面には凹線が巡る。高台は断面三角形を呈し、鋭いつくりである。内面は底面に螺旋状の暗文を施し、口縁部附近は横方向の暗文が密に施されている。これらの諸特徴からみて楠葉型の瓦器と考えられる。17~24は口径13~15cmを測る和泉型の瓦器碗で、高台は非常に雑な低いものである。内面底部には平行線状の暗文、口縁部附近には横方向の暗文がそれぞれ粗雑に施されている。25は口径31.4cmを測る東播系の捏鉢である。口縁部は断面三角形を呈する片口鉢である。焼成は須恵質で良好である。内外面共に横撫で仕上げである。26は菱口縁部である。大きく外反する口縁部を有する。内外面共に横撫で調整によるが、外面には部分的に成形時の平行叩き痕を残している。焼成は須恵質である。27・28は土師質の羽釜である。27は内傾する口縁部を有し、端部は平坦に仕上げられている。鍔は台形を呈し水平にのびる。外面は撫で調整、内面は細かい横刷毛を施す。28は口径29cmを測るほぼ全体の判る羽釜である。全体に器壁が薄く特徴的である。口縁部は外面に段を有し、内傾しながら立ち上がる。体部最大径は中位やや下方にある。鍔はほぼ水平に長くのびている。外面は中位以下を不定方向の刷毛調整、底部を板撫でよっている。内面は細かい横刷毛を鍔部以下に施している。

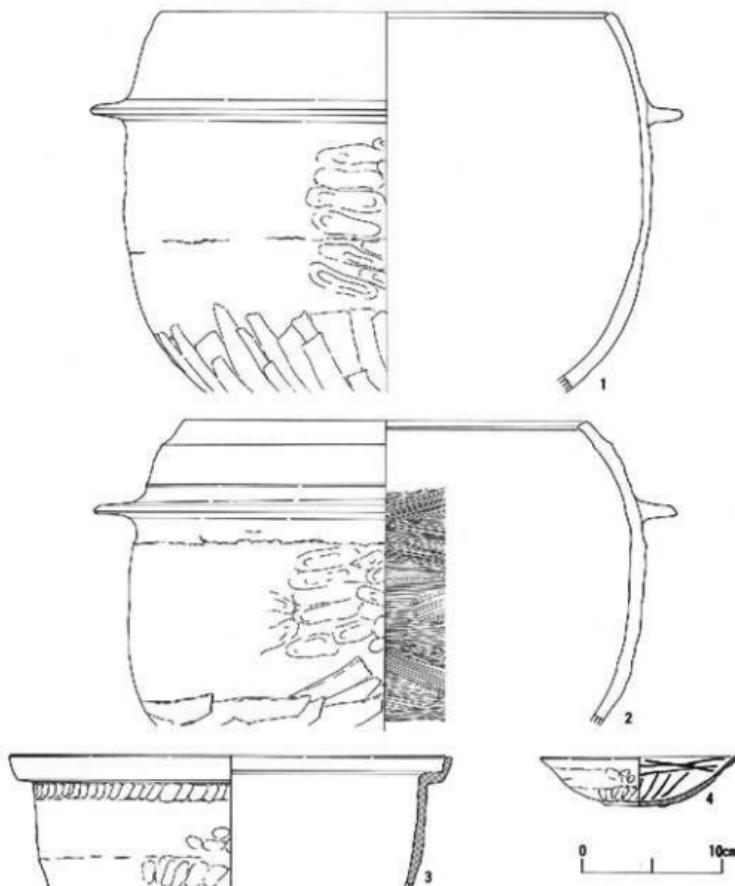


第21図 S D 05出土遺物実測図

以上の遺物は、ほぼ13世紀後半の年代が与えられる。

調査区外検出井戸（図版11-4・9・10） 井筒として使用されていた羽釜はいずれも土師質で、その法量は極めて近似している。又、井筒として転用されているため、底部は大きく打ち削られている。

上段の羽釜（1）は口径32cmを測り、口縁部は緩やかに内傾し、その端部は丸味を持ちつつも面をなしている。鋸はほぼ水平に取りつく。外面は成形時の指頭圧痕を胴部中位に頭著に残している。下半は削り状の板撫でにより調整され、平滑に仕上げられている。内面は丁寧な撫で



第22図 調査区外検出井戸出土遺物実測図

により調整されている。

下段の羽釜(2)は口径28.6cmを測る。口縁部は外面に2条の稜線が巡り、その端部は平折に仕上げられている。外面の調整は同様であるが、内面は細かい横刷毛によって調整されている。

土鍋(3)は口径31.4cmを測り、直立する受け口状の口縁部を有している。焼成は瓦質であるが、底部に向かって焼成の悪い部分が存在する。内外面共に横撫でにより調整されるが、外面には指頭圧痕を明瞭に残している。

瓦器椀(4)は口径14.0cm、器高3.5cmを測る。高台は極めて低く、かろうじて残っている程度にすぎない。内面は底面に平行線の暗文を施し、口縁部附近は横方向の暗文が認められ、和泉型の椀である。焼成はやや悪く軟質である。

これらの遺物からみて、この井戸は13世紀後半代に、その年代的位置付けが可能と思われる。

(木下)

第V章 結 語

今回の調査では、従来その範囲が明確でなかった腹部遺跡の北部の状況を、僅かではあるが明らかにすことができた。

調査面積は140 m²と狭いものであったが、弥生後期後半～終末にかけての上塙一括資料を多く得ることができた。出土した土器の中には所謂外来系土器の併出がみられ、各地域との併行関係を知る上で注目し得る資料である。以下、これらについて若干の検討を加えていきたい。

本遺跡内における弥生時代後期後半～終末にかけての遺物は、SK01～SK05までの土塙及び包含層より出土している。各土塙出土土器は層位的にほぼ同時期のものと考えられ、良好な一括資料である。そこで、これらを器種別に形態分類を行った。

1. 広口壺

広口壺A 口頸部が直線的に外傾するもの。この内、端部に面を持つものとつまんで終わるものがある。（第11図16・17）

広口壺B 口頸部が外反するもの。頸部とのくびれが明瞭なものとそうでないものがあるが、端部は上方へつまみ上げ、面を持つ。（第11図9・12・15・34、第15図1）

広口壺C 頸部が直立もしくはやや内傾し、外傾又は外反しながら聞く口縁部を持つもの。端部に面を持つもの、外方へつまみ上げるものがある。（第11図13・14）

広口壺D 口縁端部を拡張するもので、上下・上方・下方・水平の四方向へ拡張する。拡張した面に波状文、竹管円形浮文、凹線、刻み目等が施される。（第11図1・3・5・7・8・10・11）

広口壺E 所謂二重口縁の壺である。波状文、竹管円形浮文、鹿鳴き等で飾られる。（第11図2・4・6）

2. 細頸壺

口頸部と胴部以下がほぼ等しい大きさの細頸壺であり、胴部中位に最大径を持つタマネギ形のもの。口縁部はやや内弯する。外面は全て鹿鳴きされる。（第11図33、第14図1）

3. 壺

壺A 塚内第V様式の系譜の中におさまるものであるが、外面を叩きの後に、一部を刷毛目で消しているものも存在する。底部は全て平底である。頸部のくびれは不明瞭で、口縁部は外

反又はやや内寄させている。(第13図1~4)

甕B 「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部を持ち、胴部最大径が胴上半と中位以下にあるもので、各々B₁、B₂に分けられる。口縁端部は、そのままおさめるもの、面を持つもの、つまみ上げるものがある。外面は叩き、一部刷毛を施すものもある。(B₁ 第12図50、B₂ 第12図40~49・52・53、第14図4、第15図3)

甕C 受口状の口縁部を持つもので、外反した頸部が屈曲し、上外方へ伸びる口縁を持つ。(第12図51)

4. 高 杯

完形品がなく、脚柱部のみの破片が大多数で、形態分類を行うには不充分である。脚柱部を見るかぎり、短く「ハ」の字状に開くもの(A)と、長く緩やかに開くもの(B)とに分類する。(A 第12図62・63・66、B 第12図64・65・67~69、第15図4、第16図2・3、第17図)

5. 鉢

台付鉢が2個体出土している。脚台が短く「ハ」の字状に広がり、浅い杯部を有するもの(A)と、脚台は「ハ」の字状に広がるが、Aに比してその開き方は小さく、深い杯部を持つもの(B)とに分類が可能である。両者とも丁寧に仕上げられているが、Aは全面磨きされ、化粧土も施され整美である。(A 第11図32 B 第14図2)

6. ミニチュア上器

SK01より2点出土している。壺の底部と思われるものが1点ある。もう1点は手づくねのものであるが、胎土は精製されたものではなく、器壁も厚い。(第12図37・39)

弥生時代後半~終末と考えられるこれらの遺物は、先述したように埋没した時間差は層位からは認められないが(但しSK03については、他の上塙より若干新しい)型的には畿内第V様式から庄内式の新段階まで認められる。庄内式の古段階のものが大半を占めているので、恐らくこの時期にはまだ畿内第V様式の系譜を引く土器が使用されつつ、一方では庄内式の新段階の土器を使用していたと考えられる。

次に外來系土器についてみてみたい。

第IV章でも述べたが、今回の調査で外來系と考えられる土器が数点出土している。SK01からは牛駒西麓産の甕口縁部・底部・高杯脚柱部が出土し、SK04及び包含層中から吉備系の壺3点が検出された。又、破片のため図示し得なかったが、包含層より牛駒西麓産の二重口縁壺1点が出土している。

S K04出土の吉備系の壺（第15図5）は肉眼による観察結果であるが、頸部の形状や口縁の立ち上がりから、才の町I式併行と捉えて差し支えないと思われる。但し、胎土からみて吉備からの搬入品とは考え難く、在地において技法・プロポーションを模倣したものと考える。その他の吉備系の土器についてみてみると、包含層出土の壺（第18図1）は先述したものより後出の要素が看取されるが、もう1点（第18図2）は時期的に古く、概ね鬼川市Ⅲ式の中におさめることができると考える。

生駒西麓産の土器はいづれも庄内式の古い段階のものであり、壺の口頭部の破片は典型的な河内甕である。

弥生時代後期から終末にかけての豊中市域の遺跡は、猪名川東岸に沿ってその多くが存在している。それらのうち、上流の新免遺跡・山ノ上遺跡は豊中台地の西側縁辺に、島田遺跡は低地に立地し、又、猪名川沿岸以外では豊中丘陵直下の低地に、天竺川・高川に沿って服部遺跡・穂積遺跡・小曾根遺跡・北条遺跡が立地する。これらの遺跡を眺めると、豊中丘陵・豊中台地の縁辺を取り囲み、しかも河川の近くという共通の立地状況が看取できる。

この時期の豊中市域の遺跡からは従来、外来系土器が多く出土しており、穂積遺跡で東海系北陸系・吉備系・近江系、小曾根遺跡で吉備系・山陰系、北条遺跡で東海系・近江系、島田遺跡で吉備系・山陰系・東海系、西部瀬戸内系、利倉西遺跡で吉備系・山陰系・西部瀬戸内系・近江系・播磨系、山ノ上遺跡で西部瀬戸内系、螢池西遺跡で近江系・東海系等がある。外米系土器のうちで、量的には吉備系のものが最も多く、次に山陰系のものが多い。その他の近江系・東海系などは一遺跡からの出土数としては極めて僅かであるが、このような状況の中で、穂積遺跡からは東海系の土器が数量的にみて比較的まとまって出土している。

これらの外来系土器の在り方は、豊中市域の弥生時代後期後半から終末における各地域との併行関係、交流を解明する上で、一つの指針となり得るであろう。しかし豊中市域全体としては、現段階で吉備地域との関連が特徴的に認められる。そして布留式段階になると吉備系土器のみではなく、外来系土器の件出自体が減少していき、当該地域の土器として顕著な特色を持たず、齊一化の傾向にある点を指摘するに留めておきたい。

次に弥生時代以降のものについて触れておくと、先ず調査区北西で検出された平安時代の土器がある。この土器には第IV章でも述べたように黒色土器・土師器・須恵器等が豊富に含まれていた。又、器種の上でも黒色土器杯・鉢・土師器杯・皿・土釜・壺・須恵器壺・鉢など良好なセット関係を示している。このうち黒色土器では、内面の範磨きが太く粗く施されており、特徴的である。

従来、当該期の遺跡はその存在があまり知られていなかった。しかし上津島南遺跡において当該期の遺構が多く調査され、土器様相も次第に明らかになりつつある。又、穂積遺跡・新免遺跡でも黒色土器の出土が知られており、徐々に資料が蓄積されつつある。細かな特徴の抽出

等は今後の課題である。

中世に入ると調査区北側にも包含層が広範囲に堆積しており、遺構も検出された。今後、北側一帯も調査の対象地域として把握しておく必要があろう。

(木下・須藤)

参考文献

- 柳本照男「布留式に関する一試考」『ヒストリア』第101号 大阪歴史学会 1983
豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1982年度」『豊中市文化財調査報告第9集』1983
同「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1983年度」『豊中市文化財調査報告第12集』1984
同「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度」『豊中市文化財調査報告第14集』1985
同「穂積遺跡現地説明会資料」 1981
同「小仲根遺跡現地説明会資料」 1982
同「北条遺跡現地説明会資料」 1982
吹田市教育委員会「垂水南遺跡発掘調査概報」1977
関西大学考古学研究室「河内長野 大師山」『関西大学文学部考古学研究第5冊』1977
奈良県教育委員会「六条山遺跡」『奈良県文化財調査報告書第34集』1980
天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所「平等院・岩宝造跡」『天理市埋蔵文化財調査報告第2集』1985
岡山県教育委員会「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書16』1977
同「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書1』1972

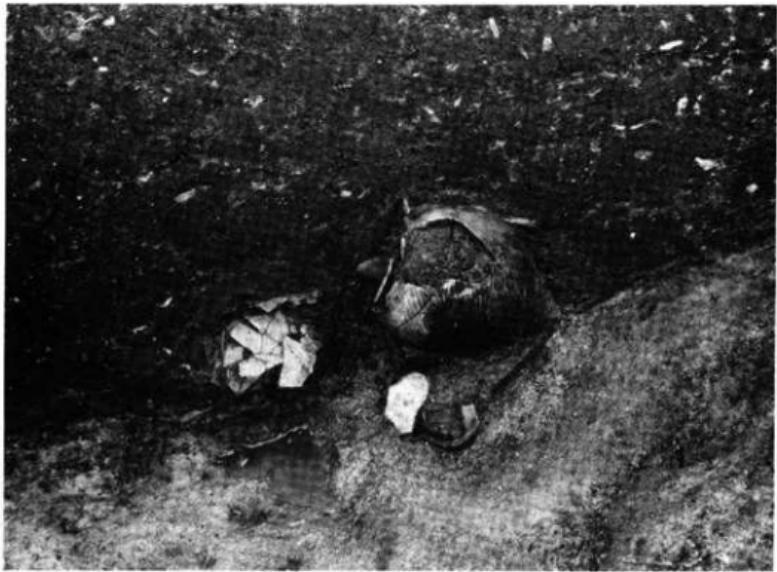
図 版



1. 調査区全景（東より）



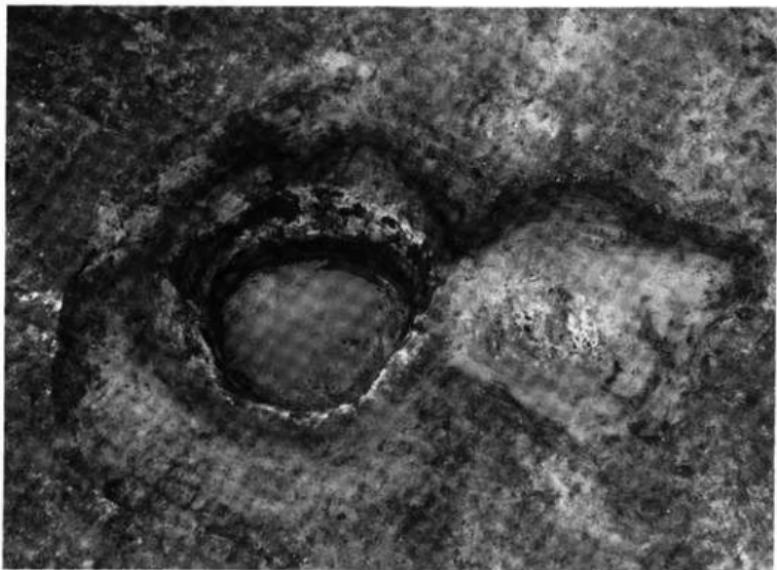
1. SK01 (南より)



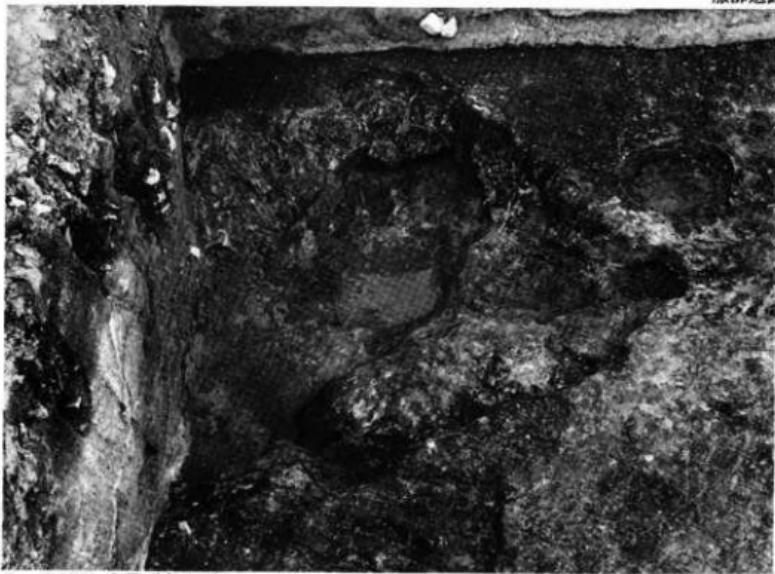
2. SK02 遺物出土状況 (東より)



1. SK03 全景 (南より)



2. SK04・05 全景 (南より)



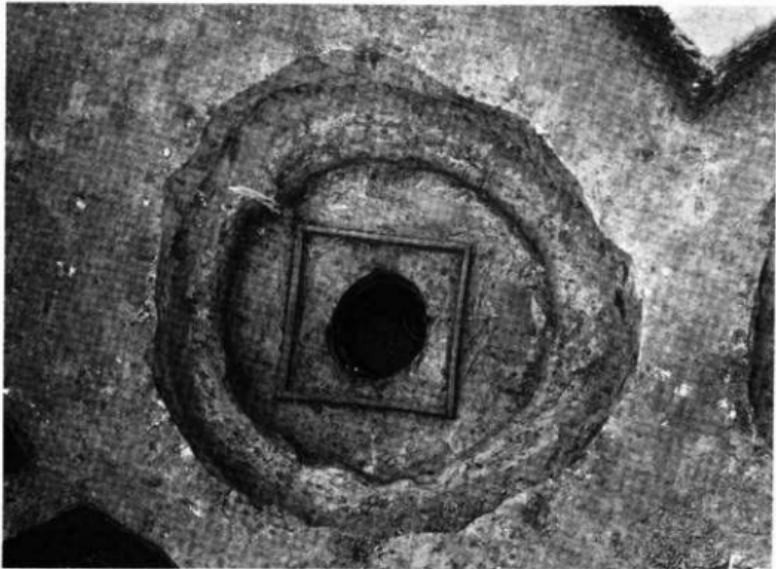
1. SK06 全景（南より）



2. SK06 遺物出土状況（東より）



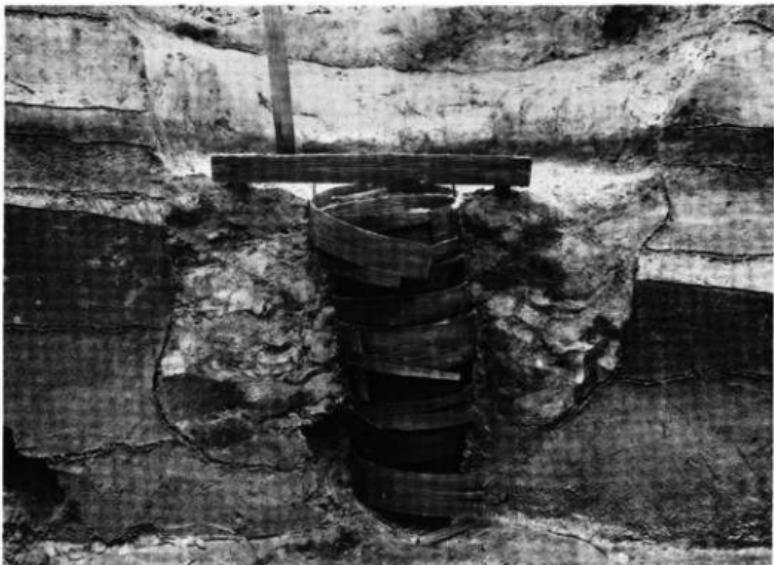
1. SD05 桁列（南より）



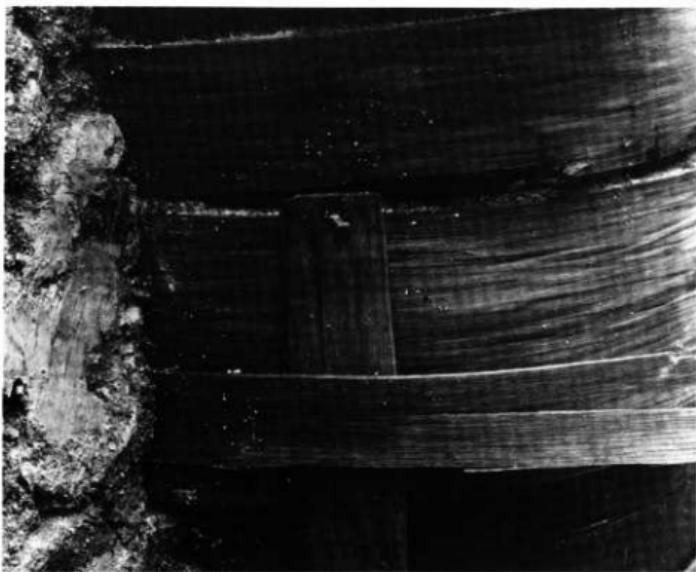
2. SE01 全景（東より）



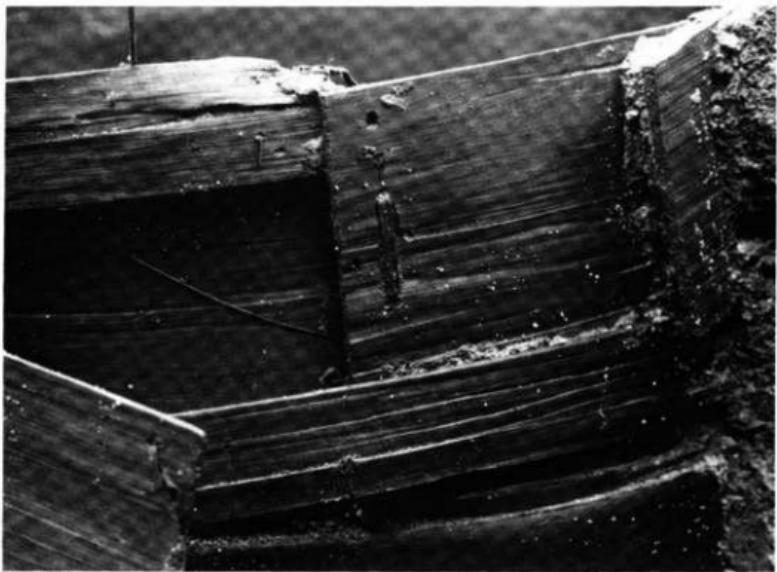
1. SE01 立ち割り後全景（東より）



2. 同上



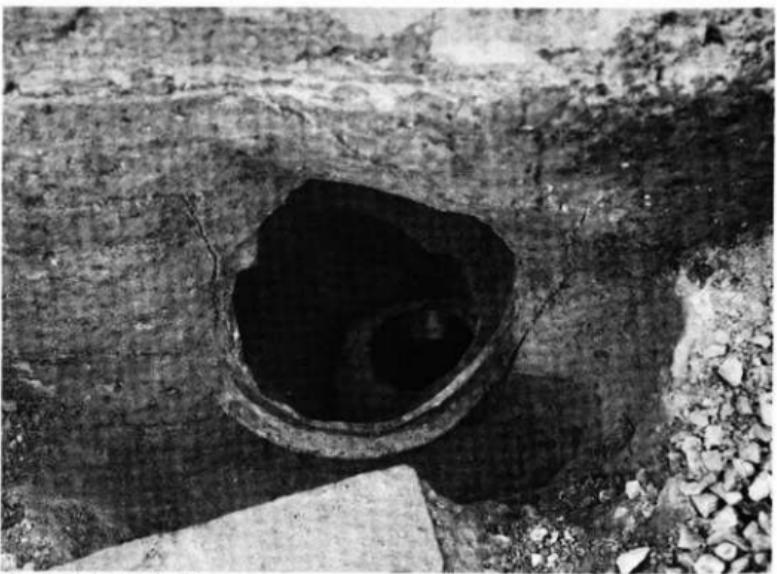
1. S E01 井戸枠曲物細部



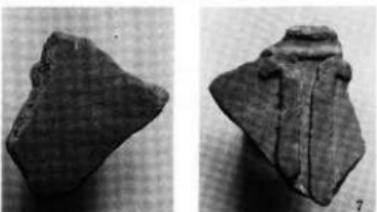
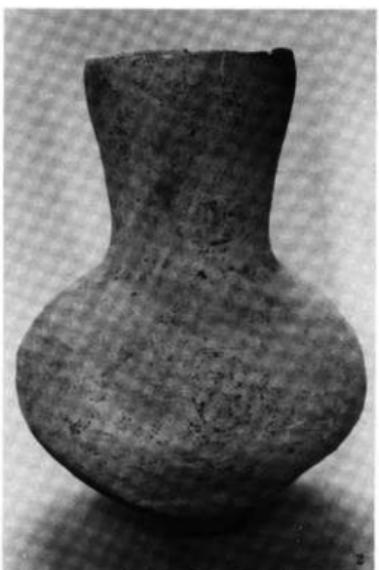
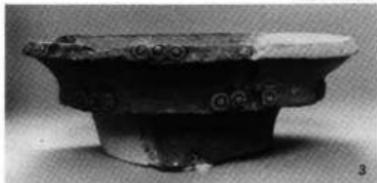
2. 同上



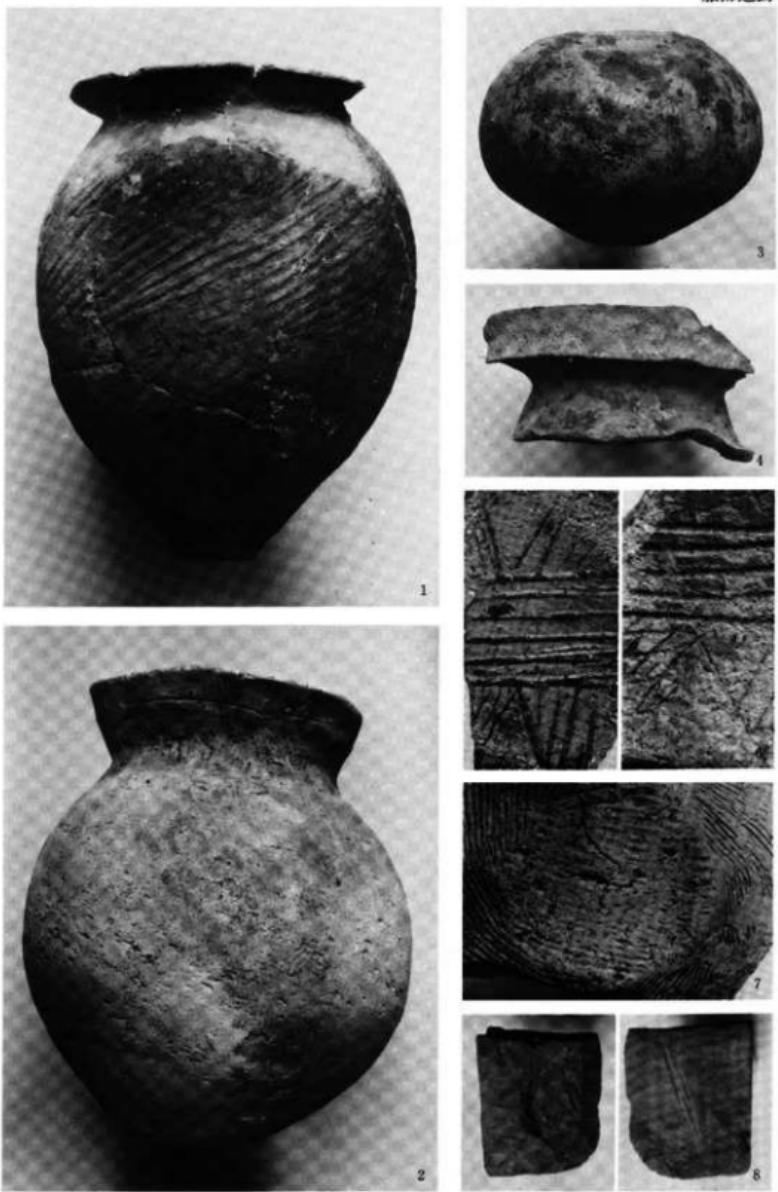
1. 調査区外検出井戸全景（南より）



2. 同上 細部（南より）



1~7. SK01



1. SK02、2・3. SK03、4. SK04、5～7. 包含層、8. SK01



1



2



3



4



5



6



8



9



10

1. SK06、2・3・8. SD05、5～7. SE01、4・9・10. 調査区外検出井戸

豊中市埋蔵文化財調査報告書 第17集

服部遺跡発掘調査報告書

1986年3月31日発行

編集 豊中市教育委員会社会教育課文化係

発行 服部遺跡発掘調査団

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号
